
ウルティメイトフォースゼロ ~ THE MATERIAL OF SAGA ~

A G I T

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルティメイトフォースゼロ〜THE MATERIAL OF
SAGA〜

【Nコード】

N1303Z

【作者名】

AGIT

【あらすじ】

ベリアル銀河帝国との戦いから二ヶ月、ウルティメイトフォースゼロはアナザースペースの各惑星に散らばり活動を続けていた。ウルティメイトフォースゼロのリーダーであるウルトラマンゼロはレギオノイドとダークロプスの目撃報告があつた水の惑星アクアスに訪れそこで見たものは……？

Episode・01 惑星アクアス（前書き）

今回はウルティメイトフォースゼロを書く初めての小説です、ベリアル銀河帝国の後という形で。
そこに大人化したマテリアルズと出会った、それぞれの出会いに結構時間を使うようにします。

OP『キラメク未来』

ED 挿入歌『すすめ！ウルトラマンゼロ』

登場怪獣

双子怪獣ブラックギラス

双子怪獣レッドギラス

帝国機兵レギオノイド

帝国猟兵ダークロプス

登場

Episode・01 惑星アクアス

ここはアナザースペースと呼ばれる我々が住む宇宙とは別の世界の宇宙。

この宇宙は、我々の宇宙でかつてM78星雲、光の国を壊滅させようとした邪悪なウルトラマン、ウルトラマンベリアルが自分の宇宙である正義に目覚めた若きルトラマンと歴代のウルトラマン達に倒されこのアナザースペースに何らかの拍子に飛ばされてしまいカイザーベリアルとして悪業を働いていた。

アナザースペースでの悪業は元の世界の宇宙にある光の国にまで魔の手が伸びていた、

その尖兵としてダークロプスと呼ばれるベリアルを倒したウルトラマンに似た赤い一つ眼の黒いロボットを送り込み光の国の都市を破壊を開始、

宇宙警備隊の戦士達が交戦を始めた。

乱戦の中、現れたのはベリアルを倒し光の国を救った赤と青、銀に胸に青く輝くクリスタル、カラータイマーが付き肩からプロテクターが掛けられ頭に二つのブーメラン、緑に輝くランプに二つの眼、ダークロプスのモデルとなった若きウルトラマン、ウルトラマンゼロがダークロプスを自分の父、赤い巨人ウルトラセブンと共に撃退

した。

そしてダークロプスが別の宇宙からやってきたと判明しその宇宙に送り込む事になったのがウルトラマンゼロだった。

光の国のすべてのウルトラマンのエネルギーを集中させゼロをアナザースペースに送り込み惑星アヌーという星で助けた青年ランの体を借り、そしてランの弟ナオと共に宇宙を護るという『バラージの盾』を求め旅をすることに。

その旅で惑星エスメラルダの王女エメラナ、エスメラルダ王家に仕える鋼鉄の武人ジャンボット、炎の海賊の戦士グレンファイヤー、鏡の星の勇者ミラーナイトを仲間にしカイザーベリアル率いる銀河帝国に戦いを挑みアナザースペースで仲間にした者達の各惑星の住人達と共にベリアル共々銀河帝国を倒したのだった。

戦いが終わり、ゼロとランは分離、だがベリアルが倒されたからと言ってアナザースペースの悪は滅んでいない、銀河帝国の生き残りもいる。

ゼロはジャンボット、グレンファイヤー、ミラーナイトと共にアナザースペースでの宇宙警備隊、ウルティメイトフォースゼロを結成しこの宇宙の平和を守るために再び戦い始めるのだった。

Episode . 01

惑星アクアス

カイザーベリアルとの戦いから二ヶ月は経過しようとしていた。ゼロは左腕に青いクリスタルが付いた銀色のブレスレット、ウルティメイトブレスレットを嵌めてアナザースペースの惑星を飛び回る毎日を送っていた。

「確かこの惑星だよな……………レギオノイドやダーククロプスを見掛けられたのは」

ゼロは銀河帝国の残党である帝国機兵レギオノイドと帝国猟兵ダイクロプスがこの惑星の近くを航行していた宇宙船の乗組員が見掛けられたと報告があった、
今、彼の目の前に見える青い惑星を訪れていた。

「後、未知のエネルギー反応が捉えられたのもここだ」

他にウルトラマンの力の源、光エネルギーでもないエネルギーの反応を掴みその調査も兼ねてやってきたのだ。

「まずは入らねーと分からねーか……………デュアッ！」

両手を大きく広げゼロはその惑星の大気圏に突入した。

そして大気圏内に入るとそこに広がるのは青い水平線とその中に浮かぶ小さな島々だ、この惑星は陸地は少ない代わりに水が多い惑星のようだった、

名前を付けるとしたらアクアスであろう、アナザースペースでもこの惑星はアクアスと呼ばれておりゼロも名前と情報は知っていた。

「なかなかいい景色じゃねーか」

感想を述べながら飛行を続けレギオノイドとダークロプスが潜伏していないか空の上から覗くように調査する。

「見たところ特に何もねーけど………見間違えかあ？」

愚痴を溢しながら高度を落とし正面が水面に近付いていく、飛行して発生する風で水が弾けていく。

「結構冷てーな」

体を左に傾け飛ぶ方向を変える。
その瞬間に突如爆発音が鳴り響く。

「どこからだ！？」

ゼロは一旦その場で立つように静止し辺りを見渡すと右方向を向くと遠くで黒煙が空へ向かって舞っているのが見えた。

「あそこか！ ジェアッ！」

ゼロは正面を下に向け両手を前に向け広げて飛行し黒煙が舞う方向へ急いで向かった、この惑星の住人にもしもの事があつたらと最悪な事態を考えつつ。

私は消えるはずだった、彼女に負けて。

私と同じ生まれをした他の二人はその元となったオリジナルの魔導師達に敗北し消滅してしまった、私も同じように……………それなのに……………私に勝ったあなたはなんで泣いているのですか？ 私に勝ったのに……………

私は消えますが……………これからのあなたの道が勝利で飾られますように。

＊

ゼロが調査に訪れる前の水の惑星アクアス、陸地が少ないこの惑星の孤島に一人の、赤紫を基準にし学生のような服に赤いラインが入り胸に紫のリボンを付け同じ色合いの長いスカートで赤紫の三日月の中に水色の宝石が入った飾りを付けた杖ルシフェリオンを握った茶髪の長い髪の女性が横たわっていた。

彼女の名は星光の殲滅者、又の名をシュテル・ザ・デストラクタ
ー、元々は10歳ぐらいの少女の姿だったはずの彼女だが何かの拍子に20代ぐらいの女性の姿となりこの惑星に倒れていた、彼女もまた別の宇宙、ゼロやこのアナザースペースとは違う宇宙から来たのだ。

すると彼女は気が付き目を覚ますと起き上がり辺りと自分の姿を見て驚きを隠せなかった。

「なぜ私は存在を……………そしてこの姿は……………」

自分の姿が大人となっていたのはもちろん、後は消滅したはず、そう思っていた、感じていたのに肉体は成長し未だ存在しているという事実には戸惑いを隠せなかった。

「ここは一体……………」

辺りを見渡しても水平線と小さな孤島しか見えずここは自分がいた宇宙にある水と緑の惑星地球ではないことがわかった。

「どうやら別の次元世界に飛ばされてしまったようですネ」

彼女の世界では別宇宙ではなく次元世界と呼んでいた、シュテルはただの人間ではない、魔導師と呼ばれる魔法使いで闇の書という魔導師の力の源、魔力を蒐集するシステムの破片からその闇の書を破壊した魔導師の少女をモデルにし生み出されたのだ、だが今の姿はその少女とは違った、まるで十年後の姿を写したような体に、短かった茶髪もロングヘアーとなっていた。

そこに突然水渋きが上がり水中からダーククロプスと両手がドリルの帝国機兵レギオノイド が浮上し姿を現した。

「質量兵器……………」

シュテルが知るとある世界の組織では機械等の兵器を全て質量兵器と呼ばれレギオノイドやダーククロプスもそれに当て嵌まる。

「やらないといけないみたいですネ」

ルシフェリオンを持ち構えるとその杖先に魔力が集結していき桃色の魔力でできた光球、魔力スフィアが生まれ。

「ブラスト……ファイヤアアアアアーツ!!!!!!!!!!!!!!」

*

そして現在、シュテルはこれからどうしたものかとアクアス中を飛び回っていた、今の自分にはかつてあった闇の書を復活させるという使命はもうない、それなのにまだ存在しているのは何か理由があるはず、そう考えていた。

「どこを飛んでも水ばっかですね……………人の気配すら感じない」

だが魚類とかは豊富に生息しており食料には困らなかった。

次にまたレギオノイド達が現れないか警戒しつつ飛行を続けていると。

「っ！」

何かの気配を感じたのだ、人の気配がなかったこの惑星でそれと同じような、だがその気配と同時に別のエネルギーも感じていた、魔力とは違うエネルギーを。

「接触してみますか……………」

何か情報が得られるかもしれない、そう考えこの惑星に訪れた者に接触を測ることにしその方向へ向かおうとしたら。

「また……………」

海中からレギオノイド とダークロプスが浮上するが何かおかしかった、溺れているようにも見えたからだ。

「海中に何かいる」

そう、この海域には何かいる、次第に二機は海中に引きずり込まれ爆発を起こし、その二機を破壊した巨大な影がシュテルの前に姿を現した。

そのレギオノイド達の爆発とは知らずにゼロは飛行を続けていた。

「この先だな！」

飛行速度を上げ、どんどん黒煙が昇る地点に接近していく。

ゼロがその先で見たものとは、それは二体の赤と黒の巨大生物と対峙する一人の女性、シュテル・ザ・デストラクターだった。

「女！？ それに……！」

ゼロは赤と黒の二体の巨大生物に見覚えがあった。

「ブラックギラスにレッドギラス！」

背中に大きな角が生え頭部にも長く鋭い角が生えたそれぞれの体色をした双子怪獣ブラックギラスとレッドギラスだ、二体は別名通り双子の怪獣である。

「なぜこの宇宙に俺の宇宙の怪獣が………」

だが今はこの怪獣からシュテルを守るのが先決、後で彼女から話を聞こうと考え頭の角から放つ赤い光線を放ちながら暴れ狂う双子怪獣達に立ち向かった。

「アレは………巨人？」

シュテルの目にゼロが写ると双子怪獣達も気付き目標をシュテルからゼロに変えた。

「ギシャアアアーツ！！！！！」

「ゼアッ！」

ゼロは足を海中に入れまるで立っているかのように浮いてみせると走りだしブラックギラスに強力なパンチを繰り出す。

「グエエエエエーッ！！！！！！？」

ゼロのパンチはブラックギラスの鳩尾にヒットし苦痛の鳴き声を上げながら後退り海中に突き出ていた岩に足を引っ掛け転倒、レッドギラスは次は俺の番だ！　と言うようにドラミングをするとずかずかと走りだしゼロに襲い掛かる。

「デエヤアアッ！！！」

突進してくるレッドギラスの勢いを利用しそのまま投げ飛ばす。

「すごい……………」

シュテルはその戦いをただじっと見ていたがブラックギラスが海中から上がってこないのに気付いた。

「まさか！」

気付いた時には遅かった。

「ジエアアアッ！！！！？」

ゼロは海中に引きずり込まれてしまった、この透き通るような綺麗な海でも海底は暗く、気付かれにくい、その地形を利用したブラックギラスに足を掴まれてしまったのだ。

「くそおおおおおーっ！！！！！！」

ゼロはそのまま海底に引きずり込まれた、レッドギラスもまた海底に潜りゼロの足を掴んで沈む速度を早めていた。

「離せええええーっ！！！！！！」

足を動かそうと力を入れるが二大怪獣の前ではまったく動かず海底奥深くに引きずり込まれてしまった。

双子怪獣は足を放す、ゼロは海底の底の地に足を付く、そこは光が射し込まないため暗く視界が悪かった。

（綺麗な惑星なのに底は結構暗いんだな）

黄色く輝く眼が暗闇を照らす但全体は見渡せず視界が悪いのは変わりなかった。

（こついつ時ミラーナイトがいればな……………）

ミラーナイトが外から鏡を作り海底まで光を反射させ射してくれらるだろうと思うが今いない者の事を考えても仕方ない、神経を研ぎ澄ましブラックギラスとレッドギラスがどこから仕掛けるか注意をするのだが。

「グワァッ!？」

背後からブラックギラスの背中の中角による攻撃を食らい前のめりに躓く。

双子怪獣は回りを泳いでいるようで頭の角はリーダーとなってい

るためそれを頼りに泳いでいた、
次はレッドギラスの攻撃を腹部に食らい後退りまたブラックギラス
の攻撃を背中に食らい前へ倒れた。

（くそお……………）

悔しそうに拳を地表に叩き付け起き上がるが立たない、考え事を
していた、この状況をどう打開するか、このままでは双子怪獣の必
殺技、攻守優れた回転攻撃ギラスピンでトドメを刺される可能性
があるからだ。

（……………そうか、目で見なければいいんだ）

考える末ゼロは気付いた、目で見ているから目の前の事しか見え
ない、ならば感じ取ればいい、ゼロの光り輝く眼は消え完全に辺り
は暗くなった。

「……………」

ゼロは集中していた、師匠であるウルトラマンレオから習った心
眼、心の目で双子怪獣を見付けようとしていた。

外ではシュテルが空を飛び海面を見ていた。

「あの巨人は一体……………」

ゼロの事が気になっていたようだ、今自分が曝されている状況を打開するためよ最大の手掛かりでもあるからだ、もし上がって来なかったら住人がいないこの惑星で一人きりになってしまふ、なぜか一人きりになるのが恐ろしいと感じていたため緊張から出た汗を流す。

「渦潮？」

その刹那、海面に渦潮ができていた。

（流れが変わった）

ブラックガラスとレッドガラスが両手を組み合って高速回転するガラススピンを炸裂して海流が変わったのだ。

（見えたぜ！）

ゼロの眼に再び光が戻り左足を上げ前に伸ばし右足を軸にし自分も高速回転を始めた。

「デエヤアアアアアアアアアアアアーツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ガラススピンにより強力な渦が発生したがゼロもそれに負けない渦が発生させる。

渦と渦はぶつかり合い激突する。

『グエエエエエーッ!!!!!!!!!!』

双子怪獣は大きな声を上げて回転速度を速めるがゼロも同じだった。

するとゼロは飛び上がり左足を下げギラススピンの中に入り込み浮上を始めた。

「海底で一体何が……………」

渦潮が大きくなるのを見つめているとそこからブラックギラスとレッドギラスが水濺きを上げて飛び出し落下して海面に叩きつけられた。

「ジエアッ!」

勢い良くゼロは海中から飛び出してきて空を舞う。

「ウルトラマン……………」

シュテルは名前も知らないのになぜかその名を自分より高く空を舞うゼロを見て呟いているとブラックギラスは頭の角から赤い光線を放ち攻撃をする。

「……………」

シュテルはルシフェリオンをブラックギラスの角に向け魔力スフ

イアを杖先に集結させていく。

「ブラストオオオ……………ファイヤアアアアーツ!!!!!!!!!!!!!!」

その魔力スフィアから桃色に輝く砲撃が放たれブラックギラスの角に直撃し押し折る。

「もう一発!」

もう一発放ち今度はレッドギラスの角を破壊した。

双子怪獣は角を破壊された痛みにも悶え苦しんでいるとゼロは頭の二つのブーメラン、ゼロスラッガーを持ち急降下する。

「ゼエイヤアアアアアアアアアーツ!!!!!!!!!!!!!!」

海面に足を付き水抜きを上げながら滑るように走り右手を真っ直ぐ伸ばしその手に握られたゼロスラッガーでレッドギラスの首を一閃、

次に回転して左手のゼロスラッガーでブラックギラスの首を一閃し双子怪獣の背後で右腕を曲げ左腕を伸ばした状態で静止する、その間、先にレッドギラスの首が崩れ落ち次にブラックギラスの首が崩れ落ち胴体が倒れると頭と共に海底深くに沈んでいった。

「呆気なかったぜ」

ゼロスラッガーを頭に戻し空を浮遊するシュテルを見る。

「人間……………」

シュテルもゼロを見ていた、ゼロはこのままでは話しづらいと考
え金色の光となり近くの孤島の大地に付くとかつて一体化したラン
の姿ではなく左腕にウルティメイトブレスレットが嵌められ白っぽ
い少し汚れたような服を着た地球人の黒髪の青年の姿となる。

シュテルもその孤島に足を付き向かい合い「あなたは？」と名前
を尋ねる。

「俺の名前はウルトラマンゼロ、この姿の名前は……………モロボシ・
シンだ」

T o t h e N e x t E p i s o d e . . .

Episode・01 惑星アクアス（後書き）

マテリアルズが20代なのはリリマテで幼女なので、あつちは次第に成長していきますから、因みにStrikers編を考えていますし。

シンはプレミアステージの人間態を東京公演で演じたマモで、宮野さんで。

次回予告

シン

「闇の書？」

シュテル

「私はその本のバグみたいなものですよ」

シュテル

「あなたに何がわかるんですか？ 生きるための意味であつた目標を失つた私達の事を……………」

シン

「分からねーよ！ けどな、目標なんて気付けば次から次へと見つかっているんだ！」

ラゴラスエヴォ

「ガゴオオオオオッ!!!!!!!!!!」

ゼロ

「一緒にやろうぜ、シュテル」

シュテル

「はい！」

次回『Episode・02 ゼロと星光』

お楽しみに

Episode・02 ゼロと星光（前書き）

少しエロネタに走りましたが、やりたかったんです！

R-15 やった方がいいかな？ と思うていたりしますがそれで読み始めた人が読めなくなったらと思うと……………

登場怪獣

進化怪獣ラゴラスエヴォ

登場

Episode・02 ゼロと星光

Episode・02

ゼロと星光

「俺の名前はウルトラマンゼロ、この姿の名前は……………モロボシ・シンだ」

名前を紹介するウルトラマンゼロことモロボシ・シン。

「私は星光の殲滅者、又の名はシュテル・ザ・デストラクター、シュテルとも呼んでください」

互いに自己紹介が終わると何者なのかを聞き始めた。

「俺はこの宇宙とは別の宇宙からやってきたウルトラマンだ」

だがシュテルにはウルトラマンという名に聞き覚えがなかった、先ほどの何となく呟いただけでどういふものなのかは知らない、

そのためシンはウルトラマンについて話した。

「このアナザースペースって宇宙とは別の宇宙にあるM78星雲、光の国を中心に設立された宇宙警備隊って宇宙の平和を守る組織に所属している光の国の一族でその種類は様々、赤かったり青かったりってな」

ゼロは両方に当て嵌まる体をしていたためそれを聞いてみたがシンも判らないようだ、なぜ自分は青と赤の体なのか。

「君は？」

「私は闇の書のプログラムの破片からできた魔導師です」

シンは「闇の書？ 魔導師？」と聞き覚えがない単語が出てきたため首を傾げる。

「魔導師とは魔法を使う者を一括りにした呼び方で先ほどのように砲撃魔法や様々な種類の魔法を使い戦います」

シンは腕を組んで近くの岩に座り話を聞く。

「闇の書とは魔導師の力の源、魔力を蒐集するための道具です、目的は研究のためなのですが……何者かがプログラムを変えてしまったため滅びの道具となり各次元世界を漂っていたのですが」

今度は「次元世界」に疑問符を浮かべたため彼が言う別宇宙という意味と説明した、シュテルの方が頭が良いようだ。

「ある世界で闇の書は破壊されその破片から私や他に二人がその破壊した魔導師の少女達をモデルにし生まれ闇の書の復活させようと

したのですがやはり彼女達に阻止され、
他の二人と一緒に消滅したはずなのですがこうして成長した姿でこの世界に」

後の事は判らない、こうして互いの正体やどういつ身分なのかを教え合った。

「簡単に言えば私はプログラムのバグみたいなものですよ」

その言葉にシンは引つ掛かりを感じたがあまり気にせずいた。

「まあだけど良かったじゃねーか、消滅したと思ったらこうして存在して生きてるんだからさ」

その何気ない誰もがそう感じるだろうという言葉を掛けるのだが。

「良かった？ 何が良かったのですか？」

だが彼女の反応は違っていた、シンを見る目に怒りが露になっていた。

「あなたに何がわかるんですか？ 生きるための意味であった目標を失った私達の事を……………」

考えは人それぞれ、それを考えなかったシンは彼女の心を知らないうちに傷付けていた。

「それは……………」

何も言い返せなかった、もし自分も生きるための目標が無くなっ

たら彼女のように怒るだろうと。

「悪かったな……………」

「別にいいです」

険悪な雰囲気になってしまいシンは苦虫を嚙んだような顔となり自分の何気ない発言に後悔していた。

するとシュテルは靴に桃色に光る羽根を展開させ浮遊する。

「どこに行くんだよ？」

「あなたには関係ありません、では」

冷たく言い捨てるとシュテルはその場から飛んでいつてしまった。

「待てよ！」

ウルティメイトブレスレットのクリスタルからメガネ型のレンズがオレンジのアイテム、ウルトラゼロアイを出しそれを持ち目に着眼した。

「デリカシーがない方でした」

ぶつぶつと言いながら飛行している後ろに気配が、振り向くとそこにはシンが変身もとい元の姿に戻った等身大のゼロが追い掛けた。
きた。

「どこに行くんだよ？」
「言う必要ありません」

だがこの惑星は水と少しの陸地しかない、元の宇宙に帰れたり大気圏外に行くこともできないためただ闇雲に飛んでいるのだと気付いていた。

ましてや怪獣が生息しているこの海で一人は危険、放ってはおけず追い掛けてきたのだ。

ゼロはシュテルの隣に並び飛行速度を合わせる。

「着いてこないでください」

「俺の行く方向もこっちなんだ、別に着いてきている訳じゃねーよ」

性格上素直じゃないゼロは遠回しにそう言い飛行を続ける、シュテルが右に行けばゼロも右に、左に行けば左と後を追う、シュテルは「やっぱり着いてくる」と呟くがとやかく言う気にはなれなかった。

「……………」
「……………」

二人は黙り込み黙々と飛行していたがその沈黙は二つの腹の虫により破られた。

「腹減ったな……………」

「はい」

「適当な島に降りて魚でも獲るか？」

「賛成です」

意見が一致して適当な小島に降りゼロはシンの姿に戻る。

「お前はどうかやって魚を捕ってたんだけ？」

「潜って手掴みです」

外見に似合わずワイルドなと思いつつ流れ着いている適当な木の枝を拾う、まったく緑がないというわけでもないようだ。

「これを槍代わりにして俺が捕まえてくるから火を起こしてくれねーか？」

「かしこまりました」

ゼロの姿で潜ればと思ったがあゝの力はこんな事に使うべきではないと気付いていたため言わずこの島に元から落ちている木の枝や石を使ったりして火を起こすことに専念した。

数分後、シンは海中から上がり木の槍には何匹かの魚が突き刺さっていた、シュテルも火起こしは成功していたためすぐに焼ける状態だった。

「結構やるじゃん」

「あなたこそ」

木の枝に魚を口から刺してたき火に近付け焼いていく、気付けばこの惑星は夜を迎えていた、夜空に星が輝いておりたき火で辺りを照らしていた。

「……………なあ」

火を見つめながらシンは話し掛けた。

「どうかなさいましたか？」

「数日間この惑星に一人でいたんだよな？　怖く……………なかったか？」

その質問にどう答えればいいのか分からないシュテル、なぜ一人きりになるのを恐がっていたが未だに分からず困っていた。

「……………分かりません、ですが一人きりになるのを怖がっていたのは確かです、なぜなのかはわかりませんが」
「怖がっているじゃねーか」

その答えに揚げ足を取ると「別にいいじゃないでしか」と返ってきた。

「さつきは本当にごめんな、何も考えずに知ったような事言っちゃまって」

「謝るのは私もです、私も頭に血が昇っていたました」

自分だけ悪いとは言わずちゃんと「も」を付ける辺りしつかりしている、魚がいい焼き加減となりその魚に噛り付き食す。

「こんな風に何か食べる前に消えたので少し感覚が新鮮です」

「そうか？」

「はい」

二人は魚を食べていき食べきれなかったのは朝食にしようと考え

葉っぱに包んだ。

「これからどうするんだ？」

その問い掛けはもつともである、この惑星は住人がいない、開拓しようとも陸地はない、最低でも食料の魚類を捕獲するためにしか訪れる機会はない。

「そうですね……やはり目標がないですからね」

先ほどの事をまだ根に持っているのか、「目標」を強調して言うてくる。

「分からねーよ、けどな、目標なんて気付けば次から次へと見つかってるんだよ」

「あなたも？」

頷いて返すと大きな欠伸をし目に涙を浮かべる。

「なんか眠くなってきた……」

「夜も遅いですから、寝ましようか？」

「そうだな」

星空を眺めるように正面を上に向くように横になるが少し風は冷たく。

「使えよ」

シンは自分が羽織っていた服をシュテルに渡して横を向いた。

「……………ありがとうございます」

少し微笑むとありがたくその服を掛け布団代わりに使い上に掛け
瞼を閉じた。

（寒いー！）

寒さには弱いシンだったが強がりなためもう返して等は言えない
と思い無理やり寝に付くのだった。

そして朝日が昇ると同時に寝付きが悪かったシンはすぐに起床し
起き上がり眠い目を腕で擦る。

「そっぴやアイツは……………」

シュテルはまだ寝ているのか、隣を向き状況を確認すると。

「なっ！？」

驚愕した、自分が渡した服は確かに掛け布団として体に掛けてい

る、だが昨日着ていた紫の服を着ていない、綺麗な素肌が露になっていた。

魔導師の服バリアジャケットは攻撃からある程度は身を守るのだが服で被っていない所も常に魔力の薄いバリアで被っている、従い寝る時もずっと着ていたら魔力を使い果たして戦えなくなる、そのためシュテルはバリアジャケットを解除したのだからが私服とか着ていないままの状態、素肌でバリアジャケットを着ているのと同じようなもののため今の状況に至っているのだろう。

「ん…………あ、おはようございます」

そこで目覚めてしまいシンはすぐさま後ろを向き「おはよう！」と声が裏返りながら返す。

「どうかなさいましたか？」

気付いていないのかと思うが自分からバリアジャケットを解除したため気付いてはいるだろう。

「ふふふ、服！ 服！」

かなり動揺しながら服を指摘。

「あ、寒かったですか？」

起き上がる、起き上がるなよと思いつつ目をギョツと瞑る、文章で18禁に引っかけられないように丸く収めるとしたら子供が産まれた直後の姿としか表しようがない、それ以上は18禁送りになる。

「服ですか？ はいどうぞ」

天然なのかシュテルはシンに服を返した、なぜ慌てているのか目覚めた直後の脳では理解できず。

とりあえず後ろを向いたまま受け取りその服を羽織る、温もりを感じていた、先ほどまで素肌のまま着ていた服を着ていると実感しながら。

（温けえ……じゃねー！）

なぜ温もりを呑気を感じているんだと心中で自分を突っ込みつつ落ち着きを取り戻そうと深呼吸を一度する。

「なぜ後ろを向くのですか？」

やはり気付いていない、シンは自分の口からそれを指摘するのは何かを失うと思い言わなかった。

「あ、いや、そのね……」
「ん？」

様子が変わだと思ったのかシュテルは近付いてきた、近付くな！嬉しいけど近付くな！と心の中で叫ぶがその願いという名の叫びは届かず肩を手で叩かれ恐る恐るゆっくり頭だけ振り向くと。

「様子が変わですよ？ 昨日の魚に当たりましたか？」

後ろにはちゃんとバリアジャケットに身を包んだシュテルがいた。

「あ、なんでもありません……」

緊張の糸が解けたため力が抜け後ろへ倒れ正座しているシュテルを下から見上げる。

「顔色が悪いですよ？」

あなたの所為だと言っても分からないだろうなと思い苦笑しつつ返す、当分この惑星にいる間は毎朝こんな事になるのかなと思いつつ溜め息を吐く。

やはり眠りから覚めた直後だから大きな欠伸をし腕を伸ばすと。

『ん？』

同時に声を上げた、シュテルはどこか触られている感覚がし下を向く、シンは何か触っている感覚がし手で触っているものを揉んでみる。

「あ…………結構大きくて柔らかいですね」

もう笑っしかなかった、上から見上げるシュテルの顔は無表情だった、無表情で立ち上がりルシフェリオンを出し杖先を下に向け魔力スフィアを集結させていく。

「ブラストオオオオオ……………！」

「ちょっと待て！」

「ファイヤアアアアアアアアーツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

シンは断末魔を上げることなく桃色の閃光に包まれた、服の事は気付かなかったのに理不尽なと感じながら。

「ヒデエ……………」

砲撃を受けたシンは煤だらけになっており涙目になっていた。

「当然の報いです、女性の体を触るといっことはこういう事です」

仁王立ちしながら言うが。

「自分はどうなんだよ……………ほとんど際どい格好で寝てたくせに……………」

「何か言いましたか？」

「いえ何も」

これ以上掘り返したらさすがに自分の身がもつと危険に曝される、そう感じこの話は終わらせた。

「それでこれからどうする？」

朝食も昨夜の魚に軽く火に曝してから食べ終えた、シンはこの惑星になぜ怪獣がいるか調べなければならない。

「……………着いていつて……………よろしいですか？」

その問いにシンは答えが決まっていた。

「もちろん、いいぜ」

行く宛ても目的もない状況、彼女を放っておくことができないシンは了承した。

「さて、飯も食い終わったからな、行こうぜ」

ウルティメイトブレスレットからウルトラゼロアイを取り出すが。

「海が……！」

目の前で海面が泡を吹いていた、シンは海に手を入れるがすぐに抜いた。

「熱い………沸騰しているのか」

「海底火山が噴火をしたのでは？」

様々な推測をするが、海を沸騰させているものが海中から姿を現した。

「ガゴオオオオオツ!!!!!!!!!!!!!!」

黒い体に側面はまるで岩のような皮膚にマグマが光るように所々が赤く光っており胸に赤く光る丸い角が付いたコアが浮き出ており正面はダークブルー、黒の模様が入り赤く、肩に二対の角、背中には上から下に掛け長さが小さくなっていく背鰭に左右にと後頭部に生えた大きな角、口に生えた長く鋭い牙の怪獣が浮上してきた。

「ラゴラスエヴォ！」

進化怪獣ラゴラスエヴォ、この怪獣は冷凍怪獣ラゴラスが溶岩怪獣グランゴンの、今自分の胸に浮きでている背中にあったコアを捕

食しその能力を取り込んで進化した姿だ。

「朝のラジオ体操がてら相手してやんか」

ウルトラゼロアイを持った右腕を伸ばし。

「デュワッ！」

それを着眼するとレンズから火花が回転しながら散りスパークする。

回りに赤と青の光の線とゼロスラッガーが乱舞していき頭から足に掛けて元の姿に戻っていく。

「ディアッ！」

両腕を左右に広げ拳が上に向くように曲げるとどんどん巨大化していきラゴラスエヴォと同じぐらいの身長となった。

シンは元の姿であるウルトラマンゼロに変身を遂げたのだ。

「ウルトラマン………ゼロ」

シュテルは静かに呟くとゼロは走りだしラゴラスエヴォに掴み掛かる。

「ゼエイ！」

チョップを胸部に食らわすがダメージは効いておらずラゴラスエヴォに殴り飛ばされ海面に倒れ水濺ぎを上げる。

「強い………！」

ラゴラスエヴォの強さに驚愕していると次の攻撃を仕掛けるためゼロに接近するラゴラスエヴォ。

「ぐっ……………うおっ!？」

立ち上がるうとすると頭を鷲掴みにされ無理やり立たされるとラゴラスエヴォはゼロの鳩尾に拳を何回も打ち込んでいくと頭から手を放し右腕を掴み軽々と持ち上げ投げ飛ばした。

「グアアッ!？」

倒れたゼロの腹に大きな足で踏み付け海底に沈めようとする。

このままではやられると察するがこの状況をどう打開すればいいかと思い付かなかった。

(どうすれば……………!)

だがその考える暇さえ与えてくれないラゴラスエヴォは踏み付けをやめない。

「グゴオオオオオッ!!!!!!!!!!」

何もできないゼロを嘲笑うように雄叫びを上げてにやけた表情で何度も踏み付けていく。

胸のカラータイマーが青から赤に変わり点滅を始めてしまう、これはエネルギーの残りが少ないという危険信号だ、

このままで危ない、そう感じたその時、ラゴラスエヴォを桃色の閃光が吹き飛ばした。

ゼロは起き上がると隣にシュテルガルシフェリオンを持ち浮遊し

ていた。

「あれだけ言っておきながら苦戦するなんてだらしがないですね」

ゼロに向かって毒を吐くシュテル。

「うるせえ！ 放っておけよ！」

性格上それには逆ギレ、立ち上がるとシュテルも合わせて高い位置を飛ぶ。

「フツ……まあいい」

一度鼻で笑うと鼻の下を右手の親指で掻く。

「一緒にやろうぜ、シュテル！」

「はい、シン………ウルトラマンゼロ！」

初めて互いの名を呼び合い起き上がるラゴラスエヴォを睨む、ゼロは左手の平を広げ左腕を伸ばし右腕を曲げて手を拳にするまるで拳法家のような構えを取る。

「デエヤアアアツ！」

まず最初にゼロが走りだしラゴラスエヴォに突貫、また性懲りもなくと迎え撃とうと口内に青い光を溜めてからそれを冷凍光線にして打ち出した。

「ゼアツ！」

ゼロスラッガーを投げ付け光線を切り払いさせると飛び上がりそのゼロスラッガーを足場にして高くジャンプし頭に戻ってくると右足に炎が纏い強烈なキック、ウルトラゼロキックを炸裂し急降下していき。

「グゴオオオツ！！!?」

ラゴラスエヴォの鼻先に命中し大きく吹き飛ばした。

「次は私が行きます！」

シュテルの足下に桃色の魔方阵が現れると回りに無数の魔力スフィアが形成されていき。

「パイロ………シューター！」

その魔力スフィアを打ち出し立ち上がったラゴラスエヴォの回りを飛び交い身動きを取れなくする。

「ガガッ!? ギャオツ!?」

下手に動くと飛び交う魔力スフィアに激突し爆発が起こり吹き飛ばと更にまた魔力スフィアに激突と繰り返していくとラゴラスエヴォはよろめく。

「散々いたぶってくれた礼、ここでしてやるぜ！」

左右の角を掴み勢いよく引き顎を膝に当てさせるとラゴラスエヴォは後退り更に上段回し蹴りを連続で何発も顔面の側面に浴びせていく。

「おっ」

ゼロはしゃがむとラゴラスエヴォはそのまま踏み潰してやろうと足を大きく上げたのだが。

「ブラスト……ファイヤアアアアアアーツ!!!!!!!!!!!!!!」

桃色の砲撃が胸に直撃と同時にゼロは腹にパンチを炸裂し大きくラゴラスエヴォを吹き飛ばす。

「ガゴオオオオオオ……!!!!!!」

「ゼツ!」

ゼロスラッガーを投げラゴラスエヴォの左右の角を切り落とすと戻ってきてから左腕を広げ水平に伸ばし。

「デヤツ!!」

腕をL字に組み薄いオレンジ色に輝く光線、ワイドゼロショットを放つとラゴラスエヴォの口内が青く、胸のコアは赤く光りそこからそれぞれ光線が放たれた、

コアからは熱光線が放たれ二つの光線は混じり合い超温差光線として放たれワイドゼロショットを一瞬にして蒸発させてしまった。

「ワイドゼロショットが……!!」

まだ切り札があるんだと言わんばかりなラゴラスエヴォは嘲笑うような鳴き声を上げる。

「ゼロ、力を合わせましょう」

「そうだな！」

ゼロスラッガーが乱舞し両手で掴むとカラータイマーの左右に装着する。

シュテルの足下と目の前に巨大な魔方陣ができ、目の前の魔方陣に魔力スフィアが形成されていく、ブラストファイヤーより巨大な。

「集え明星……すべてを焼き尽くす焰となれ……！」

ルシフェリオンは上に向くように掲げている、杖先は変化し桃色に輝く羽根が展開されている。

ゼロスラッガーは青く輝いていき光エネルギーを集結させていく。ラゴラスエヴォはもう一度超温差光線を放とうと口とコアにエネルギーを集結させる。

「ルシフェリオン！」

ルシフェリオンの杖先を目の前の魔方陣に向けるとゼ口は両手を広げる。

「ブレイカアアアアアアアアアアアツ!!!!!!!!!!!!!!

!

「ゼエ
ヤアアアアアアアアアアア
ツ！！！！！！！！！！！！！！

!

プラスチックファイヤーより巨大な砲撃ルシフェリオンブレイカーと胸に装着したゼロスラッガーから放たれる青白く輝く必殺光線、ゼロツインシューターが同時に発射された。

ラゴラスエヴォも超温差光線を放ったがそれすら蒸発させる威力に増した二人の同時攻撃には為す術なく光線が直撃した。

「ガアアアア……………ゴオオオオオオオ……………！」

光線が止まるとラゴラスエヴォは動きを止め粉々に大爆発を起こし倒された。

「フッ」

「フフッ」

ラゴラスエヴォを倒し互いの顔を見合せ鼻で笑うとゼロの体に光りが纏い等身大となると近くの小島に降り立ちシンの姿に戻りシュテルもその島に降りる。

「倒しましたね」

「ああ……………たく俺一人でも十分だったのによ」

「どこがですか？ 自分から一緒にやろうと言いだしたのに」

互いに皮肉を言い合うがそれをおかしいと思ったのかクスツと笑う。

「だけど大した奴だよ、お前は」

「あなたこそ」

シンはウルティメイトブレスレットからウルトラゼロアイを取り出す。

「おいシュテル」

「はい、何でしょうか？」

「俺の……いや、俺達の仲間になれねーか？」
「あなたの……ですか？」

海の近くまで歩いて背を向け振り向く。

「ああ、俺達、宇宙の平和を悪から守るウルティメイトフォースゼロのな！」

「……悪くないかもしれませんね」

「じゃあ決まりだな、手始めにこの惑星になんで怪獣がいるのかを調査だ！」

「かし……いえ、了解」

ウルトラゼロアイを着眼して等身大のゼロに変身するとシユテルと共に舞い上がりこの惑星の空を駆け巡るのだった。

T o t h e N e x t E p i s o d e . . .

Episode・02 ゼロと星光（後書き）

今回はミラーナイト編に移行します。

ゼロとシュテルは力押しという組み合わせですかね？

近いうちウルティメイトゼロが出るかも……………結構それに心が！

次回予告

ミラーナイト

「この怪獣達は一体……………」

レヴィ

「光翼斬！」

ミラーナイト

「大丈夫ですか？」

レヴィ

「うっん……………わからない！」

ミラーナイト

「あの甲冑は一体！？」

レヴィ

「ミラーナイト!」

次回『Episode・03 岩の惑星での激闘』

Episode・03 岩の惑星での激闘（前書き）

今回は登場怪獣がいつもより多いです。
組み合わせにこだわりや覚えているかと言つるまで。

登場怪獣

どくろ怪獣レッドキング

有翼怪獣チャンドラー

地底怪獣マグラー

円盤竜ナース

地底ロボットユートム

岩石怪獣ガクマ

岩石怪獣ガクマ

戦神ギルファス

登場

Episode・03 岩の惑星での激闘

Episode・03

岩の惑星での激闘

ここは惑星アクアスある太陽系内にある岩の惑星イメル、この惑星はこの宇宙で動力として使われているエスメラルダ鉱石以外の様々な鉱石が発掘されるのに有名な惑星。

この惑星にもベリアル軍の残党が潜伏していると報告がありウルティメイトフォースゼロの一人、銀色の体に緑の模様が入り黄色く輝く十字の眼をした巨人、鏡の騎士ミラーナイトが黄色い皮膚の大きな体の二足歩行の怪獣、どくる怪獣レッドキングと黒い四足歩行の怪獣、地底怪獣マグラーと両手が羽根の有翼怪獣チャンドラーと対峙していた。

「この怪獣達は一体………」

怪獣の事はゼロから聞いているが種類は詳しく聞いていないが自分に敵意を向けているのは分かった。

「戦うしかありませんね……………」

構えると怪獣達は身構える。

「ギャオオオオツ!!!!!!!!!!」

チャンドラーは羽根をばたつかせ突進してくるがミラーナイトは軽々と高くジャンプして飛び越える。

「ミラーナイフ！」

両手から連続で放つ手裏剣光線ミラーナイフをマグラーに向け放ち背中に命中する。

「ガアッ!？」

マグラーは苦痛の声を上げるとミラーナイトはその背中の上に着地する。

「ギャオオオオツ!!!!!!!!!!」

チャンドラーがまた突進してくるが高く飛び上がりマグラーに足を引っ掛け崖に激突し倒れる。

「ガゴオオオオツ!!」

マグラーは走りだしミラーナイトに飛び掛かるが避けられレッドキングに激突。

「ギャシャアアアーツ！！！！」

レッドキングの怒りを買いマグラーは首を捉まれ腹を連続で殴られ手を放すと尻尾を掴みミラーナイトの方へ投げ飛ばす。

「ハッ！」

だが素早いミラーナイトには当たらずマグラーは崖に激突しチャンドラーを下敷きにする。

「単細胞ですね……もう少し勉強をした方がよろしいのでは？」

両手を広げて首を傾げながら言う、その言葉は理解したレッドキングは怒り狂い殴り掛かる。

「速い！」

怒り狂い力任せに拳を振るうレッドキングの攻撃を繰り返すスピードが速くなっておりミラーナイトと互角となっていた。

「余計なことをしてしまいましたか……」

自分の発言に後悔するが仕方ないと思い構えるとレッドキングは怒りに任せてミラーナイトに襲い掛かる。

「くっ……！」

レッドキングの攻撃を紙一重の所を避けていく、生物の本能と怒りがこれほどまでに恐ろしいと感じつつ打開策を練っていく。

レッドキングから離れれば攻撃できまいと考え飛んで後退するが

その考えが甘かった。

「ギヤオオオオオオッ！！！！！！！！」

「っ！ ミラーナイフ！」

なんと近くに突き出ていた岩を押し折りそれを投げてきたのだ、その岩をミラーナイフで破壊するが更にレッドキングは口から小さい岩石を吐いてきた、ミラーナイトはそれを飛んで避け岩石が地面に当たると爆発した。

「あの岩石は爆発物ですか……………これは厄介……………！」

爆発物である岩石を吐けるレッドキングは装甲怪獣とも呼ばれている、その装甲怪獣レッドキングと戦ったウルトラマンマックスは苦戦を強いられた事がある。

ミラーナイトはこのままでは危ないと感じどうにかレッドキングを倒すための作戦を考えているとレッドキングの首に電気が走り火花が散る。

「誰だ……………！？」

新手かと思い警戒するが違った、レッドキングの背後を浮遊する水色の長いツインテールの髪に赤い瞳、八重歯と黒いレオタードを着て腰にスカートみたいなものを巻き青いマントを身に付け黒い斧のような杖を持った実にスタイルがいい女性がいた。

「女性……………！」

驚かすにはいられなかった、レッドキングはその女性に目標を変え振り向く。

「こつち向いた！ よーし！」

女性は斧を握るとそれから三日月状の金色の刃が出現し。

「光翼斬！」

斧を振るい三日月状の金色の刃がブーメランのように放たれレッドキングの左肩に命中しそこから流血し苦痛の鳴き声を上げる。

「効いた！」

ダメージがあるのに喜ぶのだがミラーナイトは。

「危ない！」

走りだし高く飛び上がりレッドキングと女性の間立つと。

「ぐわあっ！？」

「えっ……………！」

レッドキングは痛みあまり暴走しミラーナイトの右肩を殴る。

「くっ…………ハッ！」

ミラーナイトはレッドキングを蹴り飛ばす、そのレッドキングは崖に激突しチャンドラーは下敷きになり。

「シルバー…………クロス！」

痛みに耐えながら両手をクロスし光を集めて腕を広げて放つ十字手裏剣の光線シルバークロスを放ちレッドキングに命中。

レッドキングは体内の爆発物である岩石が爆発していきチャンドラーとマグラーを巻き込み大爆発を起こした。

「うわああああゝ!!!?」

女性は吹き飛ばされてしまいが素早くミラーナイトは手の平に乗せ爆風から守り抜くと力が抜けだんだん等身大サイズに縮小していきシンと同じ服装で銀髪の瞳の色が金色の清々しい青年の姿となり女性を抱き抱えたままゆっくり地面に降りる。

「大丈夫ですか？」

「う、うん……ありがとう」

ミラーナイトの青年は女性を下ろすと微笑む。

「あなたのお名前は？ 私は先ほどの姿ではミラーナイト、この姿では……騎士^{きし}鏡矢^{きやうや}と名乗っておきましょう」

「僕の名前は雷刃の襲撃者！ レヴィ・ザ・スラッシャーって名前だからレヴィって呼んで鏡矢！」

彼女はシュテルと同じ闇の書から生まれたマテリアル、だが彼女もまた10歳ぐらいの少女の姿から20歳ぐらいの女性の姿となっていた、バリアジャケットはそのままだが。

「かしこまりました、レヴィ、ところであなたはこの惑星の住人ですか？」

「うゝん……わからない！ 近くを飛んでいたら君がさっきの奴に負けてるの見て放っておけなかったから……」

「そうですか、おかげで助かりました、ありがとうございます」

鏡矢は膝を付いてしゃがみレヴィの手を取りその手の甲にキスをした、これが自分なりの女性に対する礼の仕方なのだ。

「い、いいよ………だってその所為で鏡矢の肩………」

少し照れながら言う、立ち上がる鏡矢の右肩から血が流れ着ている服に染み付いていた。

「大したことありませんよ、あなたみたいな綺麗なお方を守れたのですから」

「き、綺麗!？」と顔を赤くしながら飛び跳ねて更に照れるレヴィ。

「本当の事ですよ?」

「う、うん………ありがとう」

真に受けているが鏡矢も正直な感想を述べたのだ、彼女が本当に美しいから。

「この惑星の住人ではないとするとどこか他の………困りましたね

………この惑星は怪獣が沢山いて危険だと言うのに………」

「そんな事言われても………」

「失礼いたしました、それでしたらこの惑星に滞在する間、ウルティメイトフォースゼロの一員である私がお守りいたします」

自分の発言が失言なものと感じ謝罪をするとレヴィを守ると騎士の誇りに掛け誓い、ウルティメイトフォースゼロのことを説明する

鏡矢。

「それじゃ……………お願いしよっかな？」

「かしこまりました、レヴィ」

一礼するとまた微笑む。

「鏡矢の笑顔……………素敵だね」

「ありがたきお言葉です姫様」

「姫様！？」

「あ、失敬、つい癖でして」

自分がエスメラルダ星の騎士でその星の姫・エメラナ等に誉められる際に使う言葉だと説明した。

「ふーん……………ならここにいる間は僕が姫様だね！」

屈託がない純粋な笑顔で返す、その笑顔を見て。

「そうなりますね」

その言葉に同意する鏡矢はとても嬉しそうだった、ベリアル軍を壊滅させてから二ヶ月、エメラナとは会っていないからだ、レヴィはエメラナとは違うがとても無邪気な所を見て和んでいた。

「では参りましょうか姫様？」

「うん！」

鏡矢はレヴィの手を取ると二人は歩き出した。

「鏡矢、やっぱり大丈夫？」

「大丈夫ですよ、心配は要りません」

肩の傷が目立つのか心配そうなレヴィ。

「そういえばレヴィは私と会う前は何を？」

「鏡矢と会う前は………闇の中に帰ろうとしてた」

「闇？」と返し深く聞いてみる。

「僕は闇の書の欠片から生まれたから………」

シユテル程詳しい説明ではなかった誰でも分かる説明で鏡矢は話を聞く。

「だから闇を求めてた、けどやっぱり邪魔されちゃって消えたと思っただけだね」

「そうだったのですか………この惑星で私と会う前は？」

「小さい怪獣と会ったんだ、赤くて僕と同じ身長ぐらいのね、その住み家にも行って僕はこうして見回りをね」

見回りをしている途中にミラーナイトが戦っている所に遭遇し、騎士鏡矢と出会えたのだ。

「これからどうしよっかな？……そうだ！　ピグモン達の所に案内しようか？」

その自分を助けてくれた怪獣の名前はピグモンらしい。

「そしたらよろしくお願いします、レヴィ」

辺りは岩しかないが空だけは青く澄んでいた、何か飛んでいたから見れるぐらい。

「ん？　鏡矢！　アレ！」

レヴィはその澄んだ空に写る影を見つけ指を差した。

「アレは……円盤……」

その影はみるみる内に近付いていきそれは金色の円盤だった。

円盤は傾き竜のような頭と上部を見せそこからレーザーを放ち地上にいる鏡矢とレヴィに攻撃を仕掛けた。

「ひゃあっ！？」

「くっ……………」

庇うようにレヴィの後ろを走り岩陰に隠れる。

「あなたはここで待っていてください」

「だけど鏡矢！」

服に染み付いた血はみるみる幅が広がっていき痛々しく見えた。

「先ほども言いましたが大丈夫です、ご安心を」

両手をクロスし精神を統一すると目の前に光り輝く十字の鏡が現れ。

「ミラー……………チェンジ！」

両手を広げその鏡の中に飛び込むとその鏡は消え代わりにもつと巨大化した鏡が出現しそこから鏡矢の元の姿でもあるミラーナイトが拳から出てきて全身が飛び出てきて両手を水平に広げ岩の大地に着地した。

「ギシャアアアアーツ!!!!!!!!!!」

円盤は蛇のような姿に変化し手足が生えてきた、この怪獣は宇宙竜ナースである。

「ミラーナイフ！」

素早くミラーナイフを炸裂するがナースは鞭のようにしなやかに動き光線避けると目から怪光線を放ち攻撃、ミラーナイトはバク転し怪光線を避けるが次から次へと放たれていき側転して避けていく。

「これでは拉致が開かない……………」

一瞬考えたがその隙を突かれナースに接近を許してしまった。

「しまった……………ぐあぁっ!?!」

ミラーナイトはナースに巻き付かれ拘束されてしまった。

「ぐっ……………」

「鏡矢!」

レヴィは心配で岩陰から出てきてしまったがそれは要らなかった。

「シルバー……………!」

両手を無理やり動かし交差すると輝き。

「クロス!」

両手を少し広げるとシルバークロスが放たれナースはバラバラに切り裂いた。

「ふう……………」

バラバラになったナースを見て一息を吐くのだが、突然地響きが起こる。

「今度は何……………!?!」

すると大地は割れ二体の四足歩行の岩山のように片方は角が一本、もう片方はV字に開いた二本の角が生えた岩石怪獣ガクマが現れた、角が一本はガクマ、二本はガクマである。

「また怪獣……………！」

「ガゴオオオオオオオオオオッ！！！！！！！！！！」

「グゴオオオオオオオオオオッ！！！！！！！！！！」

ガクマ達は遠吠えを上げて走りだし同時にミラーナイトに飛び掛かった。

「うぐっ！？」

側転で避け身構えると右肩に激痛が走り膝を地面に付く。

ガクマ は口から青い光線を放つ、ミラーナイフで受け止めるのだが。

「ミラーナイフが……………！」

ミラーナイフは岩となり崩れた、ガクマの能力に冷や汗をかく気持ちに見舞われると次はガクマ が光線を放ってくる、それを左に飛び込んで避ける、右肩に負担を掛けないために。

「ミラーナイフ！」

ミラーナイフをガクマ に直撃させるが岩のような硬い皮膚の前にはダメージがなかった。

「硬い……………よし！」

そこでミラーナイトが作戦を思い付きそれを行動に移した。

「もしかして……………自分の攻撃が効かないなら……………」

レヴィはミラーナイトの作戦が何なのかが判った。

「ガゴオオオツ！！！！」

ガクマ は光線を放っていきミラーナイトを追撃するが避けられていく。

ミラーナイトは側転をしていき光線を避けていきながらガクマに接近していく。

「グゴオオオツ！！」

ガクマ も光線を放つ、その攻撃も紙一重の所を避けていく、チヤンスを伺いつつ。

「そろそろだな……………」

ガクマ達が向かい合い、間にミラーナイトは立つと口は光りだす。

「っ！ 今だ！」

ガクマ は光線を放つを止めたが遅くミラーナイトは飛び上がりガクマ の攻撃を避けるとガクマ に光線が直撃し石化してしまった。

『よし！』

二人同時に声を上げるとガクマ は同胞を自ら撃った事に怒りだしミラーナイトに光線を放つが。

「ディフェンスミラー！」

十字のマークが何個も付いた光り輝く鏡の壁、ディフェンスミラーで光線を弾き返しガクマに直撃しそれも石化する。

ミラーナイトは二体のガクマが並んで立つ位置に移動し両手を交差し。

「シルバー……………クロス！」

シルバークロスを炸裂し石化し並んで立つガクマ達を貫きバラバラに砕け散り撃破した。

「鏡を使うのは得意だね……………知らなかったかい？」

両手を広げそう言いレヴィを見る。

「やったね鏡矢！」

その言葉に頷き鏡矢の姿となろうとしたその時だった。

「ぐわあっ！？」

背中に火花が散り前のめりに倒れ膝を付く。

「また怪獣！？」

巨大な岩の陰から石像のようにも見え頭部に長い刀が装着され胸に赤く輝く発光体が付いた巨人が現れた。

「なんだあの甲冑は……………！？」

その甲冑の巨人の名は戦神ギルファスである。

.....

ギルファスは重苦しい機動音を上げながらミラーナイトに接近する。

ミラーナイフを放つがギルファスの装甲を貫けない、もう一度放つが効果はなく接近を許しアームハンマーによる重い一撃を右肩に振り下ろした。

「グ
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ツ
！
！
！
！
！
！
！
！
？
」

怪我をしているため効果は増しておりミラーナイトをひざまづかせるには十分の威力だった。

「ぐはっ！？」

しゃがむミラーナイトを太い足で蹴り飛ばし胸から火球を連射し連続で攻撃を浴びせていく。

「ぐっ……ガァッ!？」

火球攻撃で動けない所を踏み付けていき追い討ちを掛け、ミラーナイトは腕を上げるが。

「う………い………まで………か」

眼の輝きは失い腕が下がりミラーナイトはその場から姿を消した。

「鏡矢……………」

ギルファスはミラーナイトが消えたのを確認するとその場から歩き去る。

「そんな……………あぐっ!？」

背後から首を殴られレヴィは気絶し右手が銃で左手がハンマーの地底ロボットユニットに担がれ運ばれていった。

T o t h e N e x t E p i s o d e . . .

Episode・03 岩の惑星での激闘（後書き）

今回は…………アホの子がね〜

ギルファスはウルトラマンマックスに出た怪獣です。

次回予告

レヴィ

「怖いよ…………助けてよ……………」

鏡矢

「私を待っている方がいらっしゃるので」

レヴィ

「大丈夫じゃない！ そんな辛そうな顔して……………」

鏡矢

「今は、あなたは私の姫様なのですから」

次回『Episode・04 騎士の誓い』

Episode・04 騎士の誓い（前書き）

今回は少なめかな？

ミラーナイトに独自設定を付けました、後オリジナル？必殺技が……オリジナルじゃないですが、緑川光さんの代表するキャラクターの技です。

登場怪獣

地底ロボットユートム

どくろ怪獣レッドキング雄

どくろ怪獣レッドキング雌

戦神ギルファス

土塊怪獣アングロス

登場

Episode・04 騎士の誓い

「ここは……………」

ギルファスに敗れたミラーナイトは鏡矢の姿となり気を失っていた、気が付くと洞窟の中に横になっており起き上がり回りを見渡す。

「そうだ……………レヴィが……………！」

思い出し立ち上がってレヴィを探しに行こうとするが右肩に激痛が走り座り込む。

「傷が……………」

戦う前よりも傷は酷くなっており腕が思うように上がらなかった、肩が外れているようだった。

「ピグ？」

奥から赤い小さな怪獣が出てきて顔を見せた。

「君が……………ここまで？」

赤い怪獣は頷くと鏡矢の手に触れる。

「……………そうか、君の名前はピグモンって言うのですね」

「ピグ！」と友好珍獣ピグモンは元気よく返事をした、レヴィが赤い怪獣と言っていたのを思い出しこのピグモンが助けたと察した。

「ありがとうございます、ピグモン」
「ピグ！」

鏡矢はその場に座るとピグモンも座り再び手を触れる、すると頭の中にこの惑星イメルで何が起きたのかテレパシーが送られて知る数日前、ピグモンはこの惑星に元から住んでいたが突然謎の宇宙船が何機も飛来して凶暴な怪獣達を投下していったらしい。

「そうだったのか……………」
「ピグ……………ピッ！」

するとピグモンは何かを察し奥へ行くように進める。

「奥に……………」

そのままピグモンに誘われ奥に進んでいくと四足歩行でモグラのようでシャベルのような前足で眼が赤く光り鼻先にドリルのような角が生えた土塊怪獣つちくれアングロスが壁をドリルで突き破り頭だけを覗かせた。

「ああいう風に怪獣が……………」

ピグモンが先頭を歩きどんどん奥へ、すると光が見え出口が出る、そこに広がるのは岩山に囲まれた空間で上を見上げれば空が広がっており回りをよく見ると同じような出入口が空いておりピグモンも沢山いた。

「ピグ」

そこに髭を生やしたピグモンがやってきた、このピグモン達の長だろう。

「ピグ」

長老ピグモンとピグモンは手を触れ合い何が起きたのかをテレパシーで教え合う。

その刹那、崖の下の地面から赤いレッドキングと黄色いレッドキングが姿を現した。

「怪獣！」

鏡矢は身構えたがピグモンに止められまたテレパシーで。

「……………そうか、宇宙船で連れてこられた怪獣達はみんな凶暴じゃない、中にはあのように平和を愛する心優しい怪獣もいる、その怪獣達と協力して君達はこの住み家を……………」

長老ピグモンは頷くとピグモンに何かを命令し去っていった、下の赤いレッドキング雄と黄色いレッドキング雌は座り込んで休んで

いた、ここの用心棒を勤めているのだろう。
余談だがこのレッドキング達はパワードレッドキングと呼ばれる種類である。

「ピグ」

またピグモンは先頭を歩き後を歩くとだんだんに降りていく。

Episode・04

騎士の誓い

「んん……………」

どこか暗く冷たい空間の中、回りを見渡しても何も見えず感じるのは恐怖しかなかった。

「怖いよ……………助けてよ……………」

自分はもしかしたらこんな冷たい闇の中に帰ろうとしていたのか
と思い始めていた、温かい闇の中に帰ろうと闇の書の復活させるた
めに頑張った、けどもしかしたらこんな冷たいものだったのかも
しれない。

「鏡矢……………助けてに来てよ……………」

今自分は片隅にいるのは分かる、その片隅で膝を抱えて座る、ど
こだか分からない暗闇の中で。
すると突然灯りが点き辺りが見渡せるようになる。

「僕、捕まっちゃったんだ」

目の前には鉄の棒が隙間が細くなるように並べられ出れなくなっ
ており確実に拉致され横にはユートムが見張りをしていた。

「バルニフィカスは……………！？」

手元に自分の杖、バルニフィカスがなく立ち上がり通路側に近寄
り辺りを見渡すと自分が入っている檻の前の檻の中に何かの液体が
入ったカプセルの中に入れられたバルニフィカスが見えた。

「そんな……………」

策は尽きガツクリと下を向くと鳴き声が聞こえた、よく他の檻
を見ると中にはピグモンが入っていた。

「もしかして……………この星に住んでるピグモンがここに……………」

彼女の言う通りこの牢屋にはこの惑星に住んでるピグモン達が拉致されている、何かの実験か奴隷として扱うのだろう、レヴィはこの檻からどうやって脱出するか考えたが。

「……………あー！ ダメだー！ 考え付かない！」

基本この子はアホの子である。

「こついう頭を使う事はシュテルが一番なんだけどな」

口を尖らせなんで今いないんだろうとグチグチ言いながらまた座り込み後ろへ倒れ大の字に寝転んだ。

「鏡矢……………大丈夫かな……………あんな怪我だし助けにこれない……………いや、もしかしたら勝てないから見捨てたかも……………」

正直、鏡矢と出会った間もない、完全には信用できない部分もある、今の状況を考えるとマイナスの方向に考えてしまうのも心理上無理はない。

「シュテル〜王様〜助けてよ〜」

シュテル以外もう一人のマテリアルの名前を口に出すレヴィ、左右をゴロゴロ転がるとマントが絡んでくる。

「寝よう」

考えても何も思い付かないため寝る事にした、十分体力をセーブし蓄えておこうと。

「助かりました……………ありがとうございます、ピグモン」

その頃鏡矢はピグモン達の手厚い看護を受け傷の手当てをしていた、薬草等を磨り潰してそれを傷に塗り自分が身に付けていた服の袖を破りそれを包帯として使う、外れていた肩も入り十分動かせるようになっていた。

「では私は」

手当てが終わると立ち上がり住み家から去ろうとしピグモンに止められた。

「いえ、私を待っている方がいらっしやるのでぐずぐずはしていません」

軽く微笑むと両手を交差させる。

「傷の手当てしてもらいありがとうございました、必ずお礼しますので、では」

目の前に鏡が現れ。

「ミラー……………チェンジ！」

その鏡の中に飛び込むとそれは消えるのだった。

「さて、どこから探しましょうか……………」

ミラーナイトは鏡や光を反射する物がある場所ならどこでもテレポートができる能力がある、今いる場所はテレポートする時に通る空間の狭間だと考えればいい。

「……………次あの巨人が現れたら勝てるのでしょうか……………」

ギルファスの事だろう、あの分厚く硬い鎧に自分の攻撃が通用するか、素早さには自信はあるが力には自信が余りない、だが作戦がないわけでもない。

「アイアロンを倒した戦法を使ってみましょう」

鋼鉄將軍アイアロン、カイザーベリアルに仕えていた手下でミラーナイトが倒した者だ。

「これは……………」

怪しげな光を反射する場所を見付けそこに飛び出た、光を反射する物はユートムであり突然現れた等身大のミラーナイトに銃を向けるが。

「ミラーナイフ！」

ミラーナイフを全身に浴びユートムは機能を停止し倒れた、その近くには崖に設置された金属の扉がありそれも光を反射している。

「ここからなら」

鏡代わりとなっている金属の扉の中に入りまた空間の狭間を通りその扉の向こう側に出て施設内に入る。

「何の施設なんだ……………」

ミラーナイトはゆっくり歩き辺りを警戒しながら通路を進んでいくと広い空間に出る。

（ここは……………採掘場……………）

そこでは様々な鉱石を拉致したピグモン達にユートムの監視付きで発掘させていた。

（酷い……………）

ピグモン達は弱っており一度止まればユートムが電撃を放ち無理やり労働させていた。

「まずはこのロボット達の機能を停止させなければ、どこかにメイ

ンコンピュータがあるはず、そこで制御ができるはずだ」

ミラーナイトは鏡の中に隠れつつ施設内を駆け巡る。

（レヴィ、無事でいてください……………く、もう傷が痛みだして……………）

手当てしたからとすぐに治るわけもなくこんな激しく動いていたら手当てして治るものも治らない、だが立ち止まるわけにはいかない、騎士としての誇りと誓いがあるから。

（守ると誓った……………それなのに守れていない……………なんて惨めなんだ俺は……………！）

守れなかった事を悔やみ、戒め、一人称が俺と変わる程だった、元は俺と言っていたがエスメラルダ星の騎士になる時に私と言うようにしていたからだ。

（必ず助けださなければ、彼女を）

施設内を駆けているとモニターが置かれた部屋に入る、その一つのカメラはユートムが映し出しているものだった。

（レヴィ！）

その映像の一つにレヴィが映し出され早くユートムの機能を停止させようとしたのだが。

「見付かったか……………！」

ユートムが数機部屋に入り銃を向け発砲してきた。

「ディフェンスミラー！」

ディフェンスミラーを張り銃撃を防ぐとシルバークロスでユートムを破壊する。

「てめー等の相手している暇はねーんだよ！」

口調が荒くなっていた、焦る事により素に戻ってきていたのだ、ミラーナイトはキーボードを操作し施設内の見取り図を表示、牢屋がある場所を覚えるとユートムのすべての機能を停止させる。

「これで……………」

再び鏡の中に入り移動を始めた。

「あれ？ ロボットが動かなくなっただ？」

牢屋の見張りのユートムが急に動かなくなり倒れるのを見る。

「だけどバルニフィカスがないと檻が破れない！」

万事休すかと思いい後ろへ倒れると。

「シルバー……………クロス！」

光り輝く十字の手裏剣が上下に並び一直線に飛んで向かい合い並んだ檻の鉄格子を切り裂いていき外に出られる程の間が開く。

「ピグ？」

拉致されたピグモン達は疑問符を浮かべながら次々と出ていき通路の入り口に立っていた青年に礼を言いつつ牢屋から出ていく。

レヴィも檻から出るとその通路に立っていた青年を見て驚きの声を上げた。

「鏡矢！」

騎士鏡矢が立っていたからだ、鏡矢は走って近寄り床に膝を付く。

「申し訳ございませんでした、守るとお約束しておきながら守れずみすみす敵に拉致させられてしまう事態に陥らせてしまった事を」

「い、いいよそんなに畏まらなくて……それに……そんな傷で………」

包帯として巻いていた裾は血が染み付いていた、手当てした傷が開いてしまったのだろう。

「いいえ、大丈夫です」

「大丈夫じゃない！ そんな辛そうな顔して………助けられてもちつとも嬉しくないよ………」

レヴィの言う通り顔にべつとりと苦痛から出る脂汗が流れており、そして、今にでも泣きだしそうな彼女を見て少し行き過ぎたと後悔していたがそれでもなければ手遅れになっていたかもしれない。

「申し訳ございません……………ですがこれは誓いなのです、騎士の誇りを掛けた」

「誇りのためなら自分はどうなってもいいの？　それで死んじやつたらどうするの！」

心からの叫びを鏡矢にぶつける、目には涙が溜まっていた。

「大丈夫……………俺は……………死なないから」

またもや元の口調に戻っている鏡矢、だがレヴィは気付かなかった。

「ホント？」

上目遣いで首を傾げながら聞いてみると彼は微笑む。

「はい、誇りに掛けて、今は、あなたは私の姫様なのですから」

口調がまた私に戻り檻に入っていたカプセルを破壊しバルニフィカスを渡す。

「なんか又メ又メしてる」

「まあそれは我慢しましょう」

再びミラーナイトに変身すると。

「では行きますよ」

鏡の中に入り外に出るため移動する。

そして外に出るとピグモン達は住み家に向かって帰っていった。

「来る……………！」

施設がある崖を崩し中からギルファスが現れた。

「またアイツ……………」

不安そうにミラーナイトを見つめると。

「大丈夫です、次は必ず勝ちます」

優しく語り掛け巨大化していきギルファスと対峙する。

「フッ……………」

構えるとギルファスは胸から火球を放つがディフェンスミラーで受け止める。

「ミラーナイフ！」

ミラーナイフを連射するがギルファスの鎧に弾かれるが狙いがあった。

「シルバー……………クロス！」

今度はシルバークロスを放つが軽く火花が散り後退る程度だった。ギルファスは頭部の刀を持ちミラーナイトに斬り掛かるがそれを白刃取りされるが力押しで振り下ろそうとする。

「ハアアアア……………！」

ミラーナイトは足を踏ん張らせ刀を上へ持ち上げていく。

「鏡矢！ 頑張れ！」

レヴィの声援を背に受けそれを力に変え刀を奪い取りそれを自分の武器にしギルファスの胸、ミラーナイフやシルバークロスを当てた所に振るっていく。

「ハッ！」

できるだけ同じ所に刀で斬り付けていくミラーナイト。

ギルファスは腰に掛けていた盾を両手に装備し刀による攻撃を防いでいく。

「厄介な盾だ……………だが同じ硬さなら！」

同じ強度を誇る刀と盾、矛盾という言葉は知っているだろうか？ その言葉の元は商人が何でも貫ける矛と何でも防げる盾を売っていたが客に辻褄が合わないと突っ込まれてしまった事から由来する、ギルファスを矛盾に例えるならば同じ強度の刀と盾がぶつかり合えばどうなるだろうか？

「よし……………！」

ミラーナイトがもう一太刀を入れるとギルファスの盾と共に刀は崩れた、刀を奪った時の狙いは違ったが盾を持った時に作戦を練り直したのだ。

（十分傷付けましたね）

ギルファスの胸にできた亀裂を見て内心で笑みを浮かべるとその回りを鏡を重ね合わせた壁で囲むとシルバークロスを放つ、手裏剣はギルファスの胸に命中すると弾かれ回りの壁にぶつかり反射してまた胸に命中していく。

「……………」

ミラーナイトは時が来るまで待っていた、トドメの一撃を決めるための準備をしながら。

手裏剣は反射していき何度もギルファスの胸に命中していくと遂に。

「鎧を貫いた！」

手裏剣はギルファスの胸を貫き鎧全体に罅が入った、ミラーナイトはこれを狙っていたのだ。

「よし！ シルバー……………クロス！」

再びシルバークロスを放つがそれは通常よりも巨大なものだった、ミラーナイトは走りだすと飛び立ち飛行、そのシルバークロスに突貫すると自分の飛行速度により加速し、今の状態は鏡を纏っているのと同じで太陽の光が反射し輝きを増し

「!!」

そして勢いよ振り上げ右下から左上ににしギルファスを切り裂くと。

「もう一度!」

左下から右上に斜めにもう一度ギルファスを一閃しバルニフィカスを右手だけで持ち刃が上から消滅していくと斜めになったXの字の切り口から光が放たれギルファスは粉々に碎け散り倒された。

「強いぞ!　すごいぞ!　カッコイ!　僕達の勝利だ!」

飛んでいるがぴょんぴょん跳ねながら勝ちを喜ぶレヴィ、ミラーナイトはそれを見て少し笑うのだった。

「トドメの一撃、お見事でしたよ」

鏡矢の姿となり会話をしていた。

「いや〜だけど鏡矢がほとんど倒したものじゃん」
「いえ、それでもお見事でしたよ」

微笑みながら褒める鏡矢、褒められ照れるレヴィ。

「ホントはお礼のつもりだったんだけど〜」

助けられたからだろうかさっきの一撃はお礼であったのだが。

「けどまだしたりないな」

「いえ、もう十分ですよ」

それ以上のお礼は求めていない、と意味を込めて言うのだが。

「だからね鏡矢」

「……………ん!？」

いきなり抱き付かれ唇を奪われた、少しすると放れ。

「鏡矢は手だったけど……………僕は唇で倍返しね」

「え……………あ、はい……………」

いきなりのものでまだ呆然としておりまだ話は続く。

「唇にキスと〜僕が鏡矢のお嫁さんになることで助けてくれたことのお礼にするね!」

逆プロポーズされ、少し我に返る鏡矢、レヴィは子供のような無邪気な笑顔を浮かべていた。

「……………ありがとうございます、レヴィ」

「本気だからね、忘れないでよう？ わかった？」

首を傾げながら念を入れていき喋っていく。

「はい、レヴィ」

鏡矢も本気になってきていた、短い間、だがレヴィみたいな子供っぽい彼女にとっては気にしなくてもいいものなのかもしれない、恋愛は人それぞれ、言ったもの勝ちなのだから。

T o t h e N e x t E p i s o d e . . .

Episode・04 騎士の誓い（後書き）

ミラーナイトの素はサイバスターのマサキ・アンドーよりですがたまに殺すという実に物騒な事を言ってきます、まあその言われた相手は死にませんが（笑）

そして必殺技がアカシク……バスターアーツ！でした（爆）オリジナルフォームで魔装騎士モードというのを考えていたり（笑）アホの子テラカワユスで純粹、シュテルが一番ですが（キラッ）因みにレヴィが膝を抱えて座るのはいろんな意味でネタです、綺麗な体育座り。

今回はグレンファイヤー & ジャンボット×ロード編です。

次回予告

グレンファイヤー

「寒い〜なあ〜」

ジャンボット

「甘く見ているからだ」

グレンファイヤー

「女……………」

ジャンボット・ロード

「無礼者！」

グレンファイヤー

(同時は少しキツいなあ……………)

次回『Episode・05 零下140度の死闘』

Episode・05 零下140度の死闘（前書き）

王様とグレンと焼き鳥さん、意外と組み合わせ難しい。

登場怪獣

冷凍怪獣ギガス

凍結怪獣ガンダー

登場

Episode・05 零下140度の死闘

Episode・05

零下140度の死闘

アクアスとイメルと同じ太陽系内にある氷の惑星コンル、その惑星の大地はほとんどが氷で海の上を歩けるぐらい分厚い氷が張っており氷塊が突き出していた。

氷の大地の上に一機の鳥のような形の白と赤の宇宙船が着陸しておりそこから少し離れた先で炎のような赤い頭に赤く筋肉質の体に銀色の手と足、胸に赤く丸いコアが付いている炎の戦士が雪男のような筋肉質の体の怪獣、

冷凍怪獣ギガスと鳥に似たような凍結怪獣ガンダーと戦っていた。

「寒い〜なあ〜、こんな所にずっといたら死んじゃうわ」

戦士の名はグレンファイヤー、ウルティメイトフォースゼロの一人だ。

宇宙船の名前は同じくウルティメイトフォースゼロの一員ジャン

バードだ。

「手を貸そうかグレン？」

「あ？ このグレン様がこの程度の奴らに負けるとでも？」

ジャンバードの申し出を拒否するとギガスとガンダーに指を向け動かし挑発する、それに怒る怪獣達、先にギガスがドラミングしてから走りだしグレンファイヤーに殴り掛かる。

「あらよつと！」

「ガッ！？」

腕を掴まれそのまま一本背負いを食らいギガスは氷上に叩き付けられる。

「甘いぜ！」

ギガスに向かって言っていると背中に白い煙を受ける。

「冷たっ！」

ガンダーの口から吐く冷凍光線が直撃したのだ。

「甘く見ているからだ………ジャンファイト！」

ジャンバードは飛び上がり人型ロボットに変形する、胸部と頭部は白く、眼は黄色、手足は赤く左肩に縦に長い防具、右腕にも同じような防具が装備された、ジャンボットへと変形したのだ。

「ジャンブレード！」

右腕から緑色に輝く剣、ジャンブレードが飛び出しガンダーの相手をやる。

「焼き鳥！ 邪魔すんなよ！」

「邪魔はしていないだろ」

グレンファイヤー自体の邪魔はしていない、確かに正論である。

「……………勝手にしろ」

腕を回し指を鳴らし首も鳴らすと手を拳にし構え。

「俺はこの雪男野郎の相手してやらあ！」

「ガゴオオオオオオオツ！！！！！！！！！！」

グレンファイヤーとギガスは同時に走りだし手を重ね力と力による押し合いとなる。

「なかなかの怪力だな、だけどそれだけじゃ俺には勝てないぜ！」

そのままギガスを力でねじ伏せ横に倒しマウントを取り殴っている。

「オラオラ！」

「ガッ！？ ギャッ！？」

ギガスはグレンファイヤーの猛攻に為す術なく防戦一方に陥っていた。

「ギヤオオオオオッ！！！！！！」

ガンダーは冷凍光線を放つがジャンボットはロボットのため熱を発しているため凍らず。

「ビームエメラルド！」

腹部のシャッターが開きそこから緑色の光線をガンダーに放ち攻撃、ガンダーは遠くへ吹き飛び氷塊に激突する。

「ジャンナツクル！」

左腕をガンダーに向けてロケットのように拳を放ちガンダーに追いつきを掛けると同時にジャンナツクルはUターンしガンダーごと帰ってくる。

「これで！ トドメだ！」

ジャンブレードをガンダーの腹部に突き刺す、左腕にジャンナツクルは戻るとガンダーは切り口から光が放たれ爆発を起こした。

「焼き鳥の方は終わったみたいだからこっちも終わらせるぜ！」

ギガスを頭が下を向くように逆さまに持ち上げ。

「これは結構効くぜ、グレンドライバー！！！！！！」

そのまま下に勢いよく落とすグレンドライバーを炸裂しギガスは頭から氷上に激突。

「決まったああああああ！」

ガッツポーズを取ると髪の毛を掻き上げるような動作をすると頭部から炎が燃え上がる。

「相手が悪かったな」

ギガスは後ろへ倒れると白目を向いており死亡していた。

「焼き鳥、終わったか？」

「焼き鳥じゃないと何度も……………グレンに言っても無駄か……………」
「わかって……………あ？」

「どうかしたか」とジャンボットは問うとグレンファイヤーが指を差した方には。

「女……………」

「こんな極寒の地になぜ……………」

「焼き鳥、てめえ早く変形しろ、確か医療設備あるよな？」

「あ、ああ」

グレンファイヤーは炎に包まれると等身大サイズに縮小していき逆立った炎のような赤い髪の毛で炎のように強く赤い瞳、極寒の惑星のため厚着をした青年の姿、岬グレンとなる、グレンという名前が気に入ってるからこの姿でもグレンファイヤーと名乗るのも少なくはない。

「おい大丈夫か！？　おい！」

雪に埋もれていたのは女性で背中に黒い三対の羽根を付け髪の毛

は灰色つぼく中は黒いワンピースに上着は紫で金の模様が入り杖先が十字の杖を持っていた。

「こんな薄着で！」

近くに変形したジャンバードが着地し扉が開く。

「早く入れグレン！」

「ああ！」

グレンは女性を連れ機内に搭乗しその中にある医療室にジャンバードは案内しすぐに部屋に入る。

「そのカプセルに入れば後は私がやる」

部屋の中には何個もどんなに身長が高くても入れるカプセルが並んでおりその中の扉に近いカプセルの蓋が上へ上がり開く。

「頼んだぜ、服は？」

「そのまま大丈夫だ、疾しい事は考えていないか？」

「バカ言え！　んなわけねーだろこんなちんちくりん！」

その悪口に反応したのか手に力が入っている女性、胸は……中ぐらいだろう、カプセルの中に入れ蓋が閉じると何かの緑色にキラキラ光る液体が注入されていく。

「なんだよこのキラキラ光ってる水？」

「エスメラルダ鉱石を粉末状に削って混ぜた医療溶液だ」

エスメラルダ鉱石は船や様々な機器以外にもこのような使い道が

あり使用方法の幅が広い。

「そついやエスメラルダじゃそんなもんあるって船長達が言ってたな、それを使った風呂があって気持ちいいとか」

船長とはグレンがかつて用心棒を任されていた炎の海賊の海賊船、アバンギヤルド号の三兄弟船長、ガル、ギル、グルの事である、この三人は人望も厚く歳もグレンより上で物知りな所もあるためエスメラルダ星の名物も知っていた。

「なら入るか？」

「マジ？ サンキュー焼き鳥！ 寒くて寒くて仕方なかったんだよ！」

「礼を言っているか侮辱しているのかわからないな……………」

だんだんカプセルの中は満杯になっていくが顔も浸かる前に酸素ボンベのマスクみたいな物を付けられてから満杯となった。

「当分この状態にしていれば彼女も助かるだろう……………だがなぜあんな零下140度の極寒の惑星に一人で……………しかもこんな薄着で」「さあな、だけどこれはただの薄着じゃない事は確かだと思っぜ」

グレンの言葉は正しい、眠っている彼女が着ているのは魔導師が着るバリアジャケット、服で被っていない所を魔力バリアで薄く塗るよう被っているため無事だったがそんな事二人が知る由もなかった。

「まあいい、コイツが起きてから聞けばいいんだ」

「それは同意だな……………お、湯船が沸いたぞグレン」

「早速入ってくるぜ！」

グレンはどこからか桶とか取り出して部屋から駆け出た。

「まったく……元気だけは取り柄なんだから……さて、私は辺りの観測を」

ジャンバードは後の事はコンピュータと時間に任せ自分はこの惑星の観測をするためにブリッジのシステムにAIを切り替えた。

「これは………」

ジャンバードは離陸し吹雪の中飛行し辺りを観測していたら地上で何かを発見した。

「これはウルトニウム鉱石………」

ウルトニウム鉱石とは惑星の中心部にある核であり普通地上に出ている事はないのだが。

「ウルトニウムを掘り出したものが………」

だが惑星の中心部、例え極寒の惑星でもマグマは流れている、その中で自由に行き来できるものがあるのは信じがたいものだが自分のカメラに映っているウルトニウムが何よりの証拠のため信じざる得なかった。

「……………マグマの中を行き来できるの……………奴はできるだろうか……………」

奴とはグレンファイヤーだろう、彼は炎の戦士、マグマの熱に耐えられるかもしれない。

「それは犯人がわかってからにしよう」

今ウルトニウムを戻しても犯人がいるのではまた掘り出されてしまう、戻すのは犯人を捕まえるか倒した後に。

「グレンはいつまで浸かっているつもりなんだ？」

かれこれ一時間は風呂に入りっぱなしのようだったがそう思った矢先医療室で保護した女性が目覚めたようなのでAIを切り替えブリッジはオートにした、
だがその瞬間カメラに巨大な影が映るがジャンバードは気付かなかった。

(んん……………こっは……………)

医療室、そのカプセルの中で彼女は目覚めた、名前は閻統べる王、ロード・ディアーチエ、彼女もシユテルやレヴィと同じマテリアルではあり二十歳ぐらいの体になっている。

マスクが付けれカプセルに入れられているため少し誤解していた、もしかしたらどこかの組織に捕まり実験台にされるのではと。

「目が覚めたか」

溶液が抜かれていき体を浸していた溶液は流れていく。

「どこにいる？」

どこから声が聞こえているかわからないため警戒をするがジャンバードは簡単に自分の事を説明した。

「なるほど、貴様が我を助けてくれたというわけか」

腕を組んで今の状況を把握した。

「すぐに理解してもらえて何よりだ」

互いの名前を自己紹介するとシユテルより細くなくレヴィより細かいマテリアルや魔導師について説明をした。

「魔法使い………信じがたいが零下140度の中をその薄着、バリアジャケットで凌いでいたんだ、信じざる得ない」

「話がわかるな」

蓋が開きカプセルから出るが溶液に浸かっていたため身体中が濡

れている。

「ここには浴場がある、そこで溶液を洗い流すがいい」

「そうか、なら使わせてもらう」

ロードは部屋から出るとジャンバードは廊下にA Iを切り替え案内を始めた。

「何か忘れているような……………」

そう、何か忘れていたのだ、それは浴場に到着しすぐに分かった。

「誰か居るみたいだぞ？」

「そうだ……………浴場にはまだ！」

思い出し声を上げるジャンバード、そして中から。

「どうかしたか焼き鳥？」

グレンがまだ入っていたのだ、グレンは扉を開く、腰にはバスタオルを巻いている状態でギリギリだった。

「お、起きたんだな、良かった良かった」

ロードが目覚めた事により安堵するグレンだが今の姿は……………

『無礼者！』

「えっ！？」

急のためなぜ言われたかわからずグレンは道を開けロードは浴場

に入った。

「同時は少しキツいなあ……………おい焼き鳥」

「なんだ？」

「アイツからなんか聞いたのか？」

「一応はな、ブリッジでそれを話すでしょう」

グレンは着替えを済ませるとブリッジへ移動するのだった。

そしてブリッジでグレンとジャンバードはロードのことについて話していた。

「魔法使いか……………ミラーナイトみたいなの？」

ミラーナイトの技もある意味魔法に近いかもしれない、鏡を作ったりそれを使い瞬間移動したりと。

「わからないがグレンが言う通りあの薄着はただの薄着ではなかったぞ」

「俺の感も当たったってわけか」

湯上がりの牛乳を飲みながらジャンバードの話を聞いていると着替えたロードが入ってきた、グレン達が着ているようなものではなくドレスを。

「あれ、姫さんのじゃねーか？」

「女物はアレしかなかったんだ、仕方ない」

エスメラルダ星の王女のエメラナのドレスを貸したようだった。

「済まないな、これは貴様の大事な主のものだろ？」

「気にするな」と返すと。

「ところでこの無礼者は誰だ？」

「無礼者って……………」

グレンに指を差して問い掛けると「岬グレン、グレンファイヤー」と名乗る。

「タオル一丁は確かにな……………」

「その自覚はあったのか!？」

ジャンバードに仰天されてしまい少し転け「おいおい」と突っ込みを入れる。

「焼き鳥エ……………」

「まさか貴様に羞恥心があるとは」

「俺をバカにしてるだろ!？」

「もちろんだ」

「てっめえー!」

この状態では殴り合いの喧嘩はできないため口喧嘩となり暫らく言い合いが続いた。

「だがバカにされても仕方ないだろ」

「分かるか？」

「ああ」

ここにグレンの味方はいなかった、その事に絶望しつつ戦おうと
なんか決意するグレンだがそこで気になったのが。

「お前これからどーすんだよ？ 別の宇宙から来て行く宛てもねー
んだろ？」

「そうだが……」

外は零下140度の極寒の地、ほとんど決まっているようなもの
だがロードはプライドが高い故、自分から着いていくとは言いつら
かったが。

「なら来いよ」

グレンが最初にロードを見付けここに運んだ、最初から気に掛け
ていたのは彼だ、ぶっきらぼうな言い方だが彼なりの優しさと自分
から言いだしにくいロードの代わりに出た言葉でジャンバードもそ
の事は分かっていて、仲間だからだ。

「行く所ねーなら俺達に着いていけばいいさ」

ウルティメイトフォースゼローの人情家と言っても過言ではない
だろう。

「いいのか？」

「どっかの誰かの言葉借りたら無理やり……俺の仲間になれ！
って言うはずだぜ？ なぁ焼き鳥？」

「確かにな」

そのグレン達を無理やり仲間にしたウルティメイトフォースゼロのリーダーはというと。

「ぶふえつくしょん！」

「風邪ですか？」

「誰か俺の悪口言ってやがるな……………」

「でどうする？」

もう一度問うと。

「なら……………頼む、仲間に入れさせてもらう」

自分から入ってやるという物言いだがそれが彼女の言い方なのだ、ウルティメイトフォースゼロには色んな星の戦士がいる、個性派ぞろいのチームだ、どんな言い方でも気にしないだろう。

「もちろんいいぜ」

「大歓迎だ」

こうして各惑星でウルティメイトフォースゼロのメンバーはマテ

リアルズを仲間にしたのだった。

To the Next Episode . . .

Episode・05 零下140度の死闘（後書き）

次回予告

グレン

「ウルトニウム鉱石？」

ロード

「この中から探しだせばいいのか？」

ギラドラス

「ギャシャアアアアーツ!!!!!!!!!!!!!!」

レヴィ

「あ、王様〜！」

シュテル

「やはり二人もいましたか」

ミラーナイト

「それが一番の策ですよ」

ゼロ

「ブラックホールが吹き荒れるぜ！」

次回『Episode・06 集結！ウルティメイトフォースゼロ！』

Episode・06 集結！ウルティメイトフォースゼロ！（前書き）

登場怪獣

核怪獣ギラドラス

核怪獣アルビノ・ギラドラス

冷凍怪獣マーゴドン

登場

Episode・06 集結！ウルティメイトフォースゼロ！

Episode・06

集結！ウルティメイトフォースゼロ！

「ウルトニウム鉱石？」

ブリッジ、グレンとロードはジャンバードの話を聞いていた、惑星の核にしかないはずのウルトニウム鉱石が地上で発見したと。

「グレン、お前はマグマの中に入れるか？」

「ん……制限はあるが………なんとか行ける」

ウルトニウム鉱石を掘り出している犯人を止めた後の事も話し、その犯人を見付けるために動く事となった。

「そういえばさ」

「なんだ？」

グレンが唐突に話し掛けてきた。

「ウルトニウム鉱石ってなんだ？」

「我也思った」

絶句した、知らないで聞いていたのかと、ジャンバードはウルトニウム鉱石が惑星の核を形成している物質の一つで大量に掘り起こされたら惑星が崩壊すると。

『ナ、ナンダッテー！？ それは本当か！？』

呆れてものを言えなかった、ため息を吐く、AIだが吐くのだ。

「貴様らああ………」

「取り敢えず早く探そうぜ、そのウルティメイト鉱石って奴」

「ウルトニウム鉱石だ！」

「無駄にカッコいい名前だな」

ジャンバードは猛吹雪の中、飛行を続けウルトニウム鉱石を掘り出す犯人を探し続けた。

「だけどさ、その石を掘り出してる奴このまま飛んでるだけで見つかるのかよ？」

正論である、コンルも広い、その全体を探すのに時間は掛かる。

「確かに………手分けをしても長時間は外にはいられない」

どんなに寒さに強くても長時間その空気に曝され続けたら凍傷を負う可能性もある、何か効率的な搜索ができないかを考え始めた。

「なあ、ウルトニウム鉱石の反応を掴めないのか？」

「掴めるには掴めるが惑星一つに鉱石が幾つあると思う？」

その反応を追い犯人を見付ける、ロードはそう提案したがジャンバードは横槍を入れ阻むがまだ話は続いていた。

「だからその移動する反応だけを追えばいいのでは？ 動いているなら絞り込めるだろ」

つまりはこういう事、その動いているウルトニウム鉱石が鉱石が密集している地点から離れ、鉱石の反応が薄い地点まで移動し地上に出れば反応が掴めるということ。

「なるほど、それなら行けるはずだ」

「頭いいな」お前

「もっと誉めろ！ もっと誉めるがいい我を！」

天狗になっているがこの際どうでもいい、ジャンバードはすぐに惑星全体の地底に埋まっているウルトニウム鉱石の反応をモニターに映し出した。

「……………すごい数だな」

「惑星全体だからな」

モニターに映る丸い図がコンル、中心部の回りにある赤い反応がウルトニウム鉱石である。

「この中から探すのか？」

「ああ、言いだしたのはロードではないか？」

言わなければよかったと思いながらモニターを睨む。

「だけどよ、いきなり見つかるなんて事……………ねーよな？」

「そんな事ある……………」

「見付かった」

その一言がブリッジの中に響き渡りモニターには移動ウルトニウム鉱石の反応が、二つも。

「マジかよ……………しかも二つだぜ？」

「一番近い場所から向かった方がいいな」

ジャンバードは移動するウルトニウム鉱石の反応が近い場所へ飛
行する。

そのウルトニウム鉱石の反応が出ている地上には四つの赤い結晶
体が頭に生え背中にも同じような物が並び前足がヒレみたいな怪獣、
核怪獣ギラドラスが口からウルトニウム鉱石を溢しながら地上に現
れた。

「ギャシャアアアアアーツ!!!!!!!!!!!!!!」

頭の結晶体が発光すると更に吹雪は強くなる、ギラドラスは天候
を自由に変える能力があるためその能力で身の回りを守っている。

「見付けたぞ！」

そこにジャンバードが飛来しミサイルを発射しギラドラスに攻撃を仕掛けた。

「ググ……………！」

ミサイルは体に直撃するがギラドラスはビクともしていなかった、マグマの熱にも耐えるその頑丈な体には効果がなかったのだ。

「焼き鳥！ 効いてねーぞ！」

「私の所為ではない！」

「怪獣が地中に潜るぞ！」

ギラドラスは前足を器用に使い氷の大地を掘り起こし地中に潜った。

「焼き鳥！ 俺が追い掛ける！」

「頼んだぞグレン！」

グレンはブリッジから出ていきジャンバードに備わった転送装置で外に出るとスティック状のアイテム、ファイヤースティックを握り。

「ファイヤアアアアアアアアアーツ!!!!!!!!!!!!!!」

翳し、そう叫ぶとグレンは元の姿であるグレンファイヤーに変身、巨大化しギラドラスが掘り進む穴に入り追跡を開始した。

「グレンが追い掛けている今、我々はもう一つの移動するウルトニ

ウム鉱石を追おう」

「そうだな」

ジャンバードはもう一つの反応を目指し後はグレンファイヤーに任せその場を飛び去った。

「待ちやがれ！」

グレンファイヤーは地中を掘り進むギラドラスを追跡し奥深くに進んでいく。

「すばしっこい野郎だぜ！」

拳を突き出しグレンスパークという火炎弾を放つがギラドラスはその長い尻尾で弾き壁に激突し爆発するがその炎の中をグレンファイヤーは突き進む。

「弾きやがった！ ファイヤースティック！」

変身アイテムでもあるファイヤースティックを取り出し棒状の武器となりそれを持ちギラドラスを追尾していると大きな空洞に出る。そこは断崖絶壁で谷底にはマグマが流れ温度も風景も地上とは違った。

「熱っ！ やっぱマグマは俺の性には合わねーや……………」

崖の上に立ち辺りを見渡すとギラドラスがウルトニウム鉱石を採取しているところを目撃。

「そうやってウルティメイト鉱石を食っていたのか」

まだ名前を間違えていた、だが相手が判ればそんな事はどうでもいい、グレンファイヤーはファイヤースティックを構える。

「さあ、行くぜ！」

グレンファイヤーは駆け出しファイヤースティックを振るうがギラドラスはそれを避けた。

「速っ!？」

その速さに驚愕しているとギラドラスは突進してきた。

「うおっ!？」

紙一重のところを避けファイヤースティックを振り下ろし背中に叩き付ける。

「ギャシャ!？」

ギラドラスは派手に転んで壁に岩に激突。

「今だ！」

一瞬で接近しファイヤースティックを何度も叩き付けていく。

「オラオラ！」

武器を仕舞い炎が纏った素手でギラドラスの顎や頬を殴り付けていく。

「どしたどした！」

グレンファイヤーはテンポよく1、2とパンチを繰り出し攻撃していく。

「さてと、そろそろトドメといきますか」

ギラドラスを持ち上げて勢いよく地面に叩き落としグレンドライバーを炸裂した。

「これでしめえーだよ」

頭が地面にめり込み足をばたつかせているとグレンファイヤーはファイヤースティックを出し炎が纏い強く輝くと。

「オラアアアアアーツ!!!!!!!!!!!!!!」

そのまま振り下ろし棒状の武器だが炎を纏っているため叩き切る感じとなりギラドラスは縦に真つ二つとなり胴体からウルトニウム鉱石が零れ落ち倒された。

「すばしっこかったがそれだけじゃ俺には勝てないぜ」

後はウルトニウム鉱石を元にあった場所に戻し地上を目指し飛び立った。

「この辺りのはずだ」

ロードはバリアジャケットを身にまといジャンバードから出てウルトニウム鉱石の反応を追いつけていく。

「アレだな」

二人の目に入っただのは白いギラドラス、アルビノ・ギラドラスだった。

「まずは我から！」

エルシニアクロイツの杖先をアルビノ・ギラドラスに向け足下に白い三角形の魔方阵が現れ白い魔力スフィアが形成されていく。

「アロン………ダイトオツ！」

白い砲撃を放ちアルビノ・ギラドラスの胴体の側面に直撃させるがやはり効果はイマイチのようだ。

「ギャシャアアアアアーツ!!!!!!!!!!」

アルビノ・ギラドラスは口から光弾を放ち攻撃、散開して攻撃を避けるとジャンバードがビームとミサイルによる一斉攻撃をし直撃させていくがやはり今一つだった。

「黒いのと変わらないぐらいの頑丈さだな」

白い吐息を吐きながら思った事を口に出すロード、隣にジャンバードがジャンボットに変形し宙に静止する。

「焼き鳥、貴様そんな事できるのか？」

「焼き鳥ではない！」

「冗談だ」

「まったく」と呟くと左肩の防具を外し巨大な斧バトルアックスとなる。

（雷刃のバルニフィカス思い出したな）

しみじみと思いつつアルビノ・ギラドラスを睨む。

「で、どうする？」

「そうだな……同じ所を正確に狙い攻撃するのが一番の策だな」

ミラーナイトの戦法を使い攻撃しようと提案していたが。

「それが一番ですよジャンボット」

どこからか声が聞こえてきた、巨大な氷塊から鏡が現れると銀色の拳が、そして全身を飛び出し姿を見せた。

「ミラーナイト！」

イメルにいたミラーナイトが駆け付けたのだ。

「あ、王様〜！」

「レヴィ！？」

ミラーナイトの銀色の手の平にはレヴィが居りそこから飛んでロードの隣に。

「久しぶり〜！」

「まさかお前もこっちに……………となると……………」

ゆるやかな話をしているアルビノ・ギラドラスが駆け出し飛び付いてきそうだったが桃色の閃光が直撃し吹き飛ばされた。

「やはり二人も居ましたか」

「シュテル！」

そこにシュテルが厚い雲の中から出てくるように降りてきた。

「シュテル〜！」

「おっと」

レヴィはシュテルに飛び付いてロードも巻き込み抱き付き、頬擦りして再会を喜んだ。

「おいよせ、恥ずかしい」

「王様のツンデレ」

「誰がツンデレだ!」

そして金色に輝く光が氷の大地に降り立った。

「はるばるアクアスから来てやったぜ」

『ゼロ!』

光が収まるとそこにはゼロがいた。

「よっ、グレンは？ まさかとうとう死亡フラグ立て過ぎて……
南無」

手を合わせてほざいていると後ろから炎の戦士がやってきた。

「誰が死亡フラグ立て過ぎてるって?」

「生きてたのか!？」

「生きてるわ!」

グレンファイヤーも到着しウルティメイトフォースゼロが揃い、
マテリアルズも揃った。

「シュテルも王様も会わないうちに大きくなったね」

「お前もだろ」

「ですが戦いには邪魔なだけです」

アルビノ・ギラドラスを放ったらかしにしまたゆるやかな話をしているが。

「取り敢えず、寒いしアイツをなんとかしようぜ、他にも怪獣いるみてーだし、しかもなかなか厄介な」

氷塊の陰から巨大な白い毛並みを携わえたゾウのような怪獣が姿を見せた。

「マーゴドンか」

それは冷凍怪獣マーゴドン、様々な惑星でマグマを吸収し数多くの惑星を滅ぼしてきた恐るべき怪獣だ。

「マーゴドンは俺とグレンでやる、ミラーナイトとジャンボットはアルビノ・ギラドラスを頼む」

「御意」

「任された」

ゼロとグレンファイヤーはマーゴドン、ミラーナイトとジャンボットはアルビノ・ギラドラスの方を向く。

「私はゼロの方に付きますので」

「我はグレンだな」

「僕はもちろん鏡矢」

マテリアルズの役割も決まり。

「ブラックホールが吹き荒れるぜ！」

ゼロは右腕を伸ばし人差し指と親指を立ててマーゴドンに向けて言い放つと一斉に走り出した。

「ゼアアッ！」

「あらよつと！」

ゼロとグレンファイヤーは同時にマーゴドンの顎を蹴り上げると
タイミングよく上段回し蹴りを左右から食らわしタックルで跳ね飛
ばすと後ろから桃色と白の砲撃が放たれ更に吹き飛ばす。

『危ねっ！？』

砲撃は頭の先を擦っており少し煙が上がっていた。

「あ、すみません、まさか擦るとは……………」

「いや、そんな所にいるのが悪い」

『酷っ！』

マーゴドンはすぐに起き上がり冷凍ガスを鼻から噴射するがゼロ
はウルトラゼロディフェンサーを展開しガスを受け止める。

「ファイヤアアアアアーツ!!!!!!!!!!」

拳に炎を纏わせて突撃しマーゴドンの顔面をパンチすると火花を
散らすのだがその火花は体に吸収されてしまった。

「あれえ？」

「アイツはエネルギーを吸収する事ができる！ だからさっきの砲
撃も……………」

二人の砲撃もかなりの高威力、もしかするともしかするであつた。

「バオオオオオオン!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

マーゴドンは鼻や身体中から勢いよくガスを噴射し更に凶暴化し
まるで暴れ馬のように動き回り鼻を伸ばし氷塊を破壊しその破片で
攻撃を仕掛ける。

「地形を利用した見事な攻撃ですね……………」
「何感心してるんだよ！」

なおもマーゴドンは暴れ回るため近付けない。

「ミラーナイフ！」

ミラーナイトはミラーナイフを放ちアルビノ・ギラドラスに攻撃
をするがすべて弾かれる。

「雷光斬！」

レヴィが金色の砲撃を発射するがそれは後退るだけで大したダメ
ージはないがすべて同じ所、右側面の胴体の一部分を正確に直撃さ
せていた。

「ジャンナックル！」

ジャンボットはジャンナックルを発射しまたアルビノ・ギラドラ
スの右側面の胴体に直撃させる。

「連携しよー！」

その一言にミラーナイトは頷きアルビノ・ギラドラスの回りを鏡
の壁で囲み両手を交差させシルバークロスを放つ体勢に入るとバル

ニフィカスから金色の三日月状の刃が伸びる。

「シルバー……クロス！」

「電刃翼！」

二つの刃が飛ばされ重なり合いシルバークロスに雷の属性が追加されアルビノ・ギラドラスに直撃すると反射し壁に直撃するとまた反射とギルファス戦の時と同じ戦法で攻撃していく。

「……………」

反射していく刃をただじっと見つめているとようやくシルバークロスはアルビノ・ギラドラスの胴体に突き刺さり更に電刃翼の効果で体を痺れさせ動きを止めると壁が消滅すると。

「今だジャンボット！」

「ああ！」

ジャンボットは走りだしバトルアックスを大きく振り上げ。

「必殺！ 風車！」

勢いよく振り下ろしシルバークロスが突き刺さる胴体にバトルアックスが直撃するとアルビノ・ギラドラスは大きな咆哮を上げ倒れ込み傷口からウルトニウム鉱石が零れ倒された。

「僕達の勝利だ！」

一方マーゴドンに苦戦しているゼロ達はどうか冷凍ガスをウルトラゼロディフェンサーとシュテルとロードの魔力によるバリア

戦闘後、ゼロ達は人間の姿となりジャンバードの中に入っていた。

To the Next Episode . . .

Episode・06 集結！ウルティメイトフォースゼロ！（後書き）

次回予告

シン

「何か覚えてないのか？　なんでアナザースペースに来たのかを」

レヴィ

「青くて鳥のような綺麗な光が」

シュテル

「まさにロストログニアですね」

ジャンバード

「モシリスで未知のエネルギー反応をキャッチした」

シン

「新生ウルティメイトフォースゼロ、出動だ！」

次回【Episode・07　モシリス】

Episode・07 モシリス

前回、グレンファイヤーとジャンボットはウルトラマンゼロとミラーナイトと合流、同時にロード・ディアーチェもシュテル・ザ・デストラクターとレヴィ・ザ・スラッシャーと新たなウルティメイトフォースゼロのメンバーも合流するのだった。

Episode・07

モシリス

「で、何か覚えてないのか？　なんでアナザースペースに来たのかを」

ジャンバードのブリッジの中、シン達はシュテル達に聞いていた、なぜこの宇宙に来たのかを。

「ほとんど覚えていません」

「僕も」

「我もだ」

同じ答えしか返ってこずまさか三人一緒だとは思わず間が抜けた。

「あ…………そう…………じゃあ何かそれっぽいものは？」

思い出そうと頭を抱えていると。

「あ、そういえば……………」

レヴィが先に声を上げた、何かを思い出し拳で手の平をポンと叩いて。

「体が消滅して意識だけが次元の狭間の中をさ迷ってた時なんだけど…………あの時光が見えた」

後の二人も思い出したように頷き。

「青くて鳥のような綺麗な光、最初は嫌だな〜って思ってたんだけど見てたら暖かくて、前にいた闇の中より」

「確か…………惑星を掴めるぐらいの巨大な黒い手の平の上で光っていました」

「あれほどの強大なエネルギーだ、次元震を起こしても不思議じゃない」

次元震とは時空を揺るがす地震である、それが影響し様々な宇宙の住人や地域や建物が別の宇宙に行き来してしまうこともある。

「惑星を掴めるぐらいの巨大な黒い手の平……………見覚えがあるような……………」

シンは顎を指で支えるような形にしていると。

「これじゃないのか？」

ジャンバードがモニターに巨大な黒い手の平型の要塞マレブランデスを表示した。

『それだ！』

三人は同時に声を上げてモニターに指を差した。

「青くて鳥のような綺麗な光……………まさかな……………」

シンは感付いた、その光が何なのかを、ジャンバードはその要塞で起きた戦いの最終決戦の映像を表示した、それにはグレンファイヤー、ジャンボットが黒くて背中に緑色に光る鉱石を生やした赤い模様が入った怪獣と戦っている映像だった。

「これはなんだ？」

「これは私とジャンバードが守護する惑星エスメラルダで起きたベリアル軍との戦いです」

ベリアル軍について簡単に鏡矢が説明しているとその怪獣がその主導者カイザーベリアルがエスメラルダ鉱石により凶暴化したアーケベリアルと話す、

アーケベリアルは口から強力な破壊光線を上にいた何か弓矢を構え

たゼロに放つのだが鏡が割れその破片の中にミラーナイトが、ゼロを鏡で写し陽動していたのだ。

本物のゼロはアークベリアルの後背におり青く光る弓矢を発射した、まるで鳥のような形だった、矢はアークベリアルに直撃すると激しい光を放ちアークベリアルを消滅させた。

「おそらく君達が見たのはこれだ、ゼロがウルティメイトイージスの力でアークベリアルを倒した時の光だ」

「ウルティメイトイージス？」

シンは左腕に嵌めているウルティメイトブレスレットを見せた。

「これは神の力を持つと言われる伝説の超人ウルトラマンノアの力が秘められたこの宇宙に伝わる伝説の盾なんだ」

「神……………まさにロストロギアですね」

シン達は自分達が知らない単語が出てきたため首を傾げるとシュテルが説明に入った。

「ロストロギアとは過去に滅んだ超高度文明から流出し特に発達した技術や魔法のことです、闇の書もそのロストロギアの部類に入ります」

その説明をジャンバードは記録しているのだが話に着いていけなくなったグレンは爆睡し始めた。

「そして魔法を使わない科学兵器等は質量兵器とされています」

質量兵器はジャンバードやレギオノイド等がそれに当て嵌まるだろう。

「なるほどな……そつちにも色々な科学があるってことか」

シンは光の国で地球の防衛の任務に着いた事があるウルトラマン達から地球の科学でできた兵器等を聞いた事がある、ネオマキシマ、テクノプラズマ、オプチカムフラージュやメテオールと言ったものを。

「そついうことです」

が用意したお茶に口を付けるとジャンバードはまともに入った。

「君たちが消滅しこのように実体、体が復元され二十代ぐらいの体に成長しこの宇宙に出てしまったのは」

精神が時空の狭間にさ迷っている時にアナザースペースの近くまで接近しゼロのウルティメイトイージスによる攻撃により次元震が起こり精神がアナザースペース内の様々な惑星に散らばる際に放出されたエネルギーを吸収したのかその量が多く強過ぎて体が復元し更には二十代の体に成長してしまったと推測した。

「ということだ」

約二名ちんぷんかんぷんで無い頭をフル回転して理解しようとしているが全然理解できないようだった。

「無理に理解しようとしなくていいですから」

シュテルに言われ考えるのをやめた。

「そうだな」
「そうする」

ジャンバードはグレンを「バカ」、ロードはレヴィを「アホ」と思っただった。

「それで本当にこれからどうすんだよお前ら」

シンはもう一度最後に三人にこれからの事を聞いてみた、必要ならばどこかの人口密集地がある惑星に送る事を考えたが。

「私に仲間になれって言うておいてそれですか？」

鏡矢達はやっぱりという顔していた、言っていたのかと。

「なので着いていきますよ、やる事ありませんから私は」
「我もだな、グレンとジャンバードに誘われたし」

二人は仲間になれと言われたから着いていくのだが一名違った理由が。

「僕は鏡矢がいるから」
「はい」

何か不思議な桃色のオーラが放たれているのに気付き何があったのだろうか質問してみた、グレンが。

「はいはいーい！ 二人は付き合っているんですかー！」

まるで修学旅行の乗りで。

「はい、私達は……………」

「結婚を誓い合った仲だから」

顔を赤くしてカミングアウトするレヴィ、その発表に「ナ、ナン
ダッテー！？ それは本当かい！？」と反応するシンとグレン。

「僕がプロポーズしたんだよ」

「されてしまいました、不覚にも唇まで」

頭掻きながら記者会見を続けていたら二人は「リア充爆発しろ！」
と叫んだ。

「お前達……………バカか」

ジャンバードはもう言わずにはいられなかった。

「何か負けた気がします」

「うぬ、我もだシュテル、あの末っ子があそこまでな……………」
「嬉しいような複雑のような」

お母さんか！ 的な話をしているとアラートが鳴り響く。

「どうしたジャンバード！」

「惑星モシリスで救難信号をキャッチした」

「モシリス……………確かアヌーの開拓キャラバンがそこにもあったは
ずだ、化石燃料や井戸を掘って移住できるように」

モニターに茶色い惑星が写し出される、それがモシリスでこの茶
色はすべて砂である。

「全体が砂と少しの岩しかない惑星モシリス、一体ここで何が……」

だが考えている暇はない、救難信号が出たからには助けを求めている人々がいる、そう思い。

「行くぞ、モシリスに、考えてる暇はない」
「そうだな、着いてから考えようぜ」

髪を掻き上げ答えるグレンに「御意」と返す鏡矢。

「で、いいよな？」

シュテル達にも聞くが答えは決まっていた。

「このチームのリーダーはあなたなのでですからその決定に従いますよ」

「我も同意見だ」
「僕も」

フツと笑うとモニターの方を向いて。

「ジャンバード！ 進路をモシリスに向けてジャンプだ！」
「了解！」

ジャンバードはワープ機能を使い誤差はあるがその場から消えモシリスに向かった。

その頃、救難信号を出したモシリスに滞在する開拓キャラバンでは……………

「レギオノイドじゃないアレはなんなんだよー！」

キャラバンのメンバー達は何かから逃げていた、後ろから迫る巨大な黒い虫のような生物から。

「ピロロロロ……ゼットーン」

To the Next Episode...

Episode・07 モシリス（後書き）

次回予告

レヴィ

「本当に砂しかない」

シン

「アレは……………まさか！」

ゼットン

「ゼエ〜ット〜ン……………ピロロロロ」

シュテル

「砲撃が効かない！？」

グレンファイヤー

「それとめちやくちや強い！」

次回『Episode・08 宇宙恐竜』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1303z/>

ウルティメイトフォースゼロ～THE MATERIAL OF SAGA～

2011年12月16日18時48分発行